

# 学問上に於ける大学派と北里派との衝突史

田中祐吉

## 序

本書は明治より大正にかけ大学派と北里派に起りたる純学問的論争を系統を追うて最も公平に且最も詳密に記載し、曾て我等同人の発行する雑誌『医学及医政』誌上に連載して医史外伝なりとの世評を博せしものなり。読者中書を寄せて本編の保存に便ならざるを以て一冊子とせんことを希望さるる向多し。則ち誤字誤植を訂正し、茲に単行本として発行することとせり。若夫れ、他年一日、大学派と北里派の衝突因由を知らんとする好事家の参考となり、将た医史編纂の資料と成るを得ば我等の努力も亦徒勞に属せざるを得ん乎。本書の発行に際して其顛末を略叙して序とす。

大正六年臘月中

雄文社編輯局に於て

長尾折三識

両雄並び立たず、呉越友たり難し、吾医学界の王国を二分して各々其一を保てる所謂大学派と北里派とが相対立して学問的に將た社会的に衝突を繰り返えしつつあることは周知の事実なり。之を或一面より觀れば、学界の一不祥事たるが如きも、而かも他の一面より之を觀る時は、蓋し亦た已むを得ざる所、恰かも朝野の二大政党が相対抗して権勢を争うが如きのみ、夫れ政治思想の發達が自然に政党の崛起を促すと同じく、学問の進歩に伴うて、学派の起る所以のもの、亦た自然の数なり、此意味より觀れば、所謂大学派と北里派との対立し、学界の中原に鹿を逐わんとすも敢て異とするに足らず、何ぞ之を目して吾医学界の不祥事と稱するを得んや。然れども這は固より表面上の觀察のみ、人は元來感情の動物なり名誉の奴隸なり、政党と云い学派と稱するも、真に国家のために貢獻し、真に学問のために盡さんが為に相争う者に至つては古今東西を通じて甚だ尠く、其の多くは個人乃至団体の野心、虚名及び私情等の控制する所となり、国家若くは学問の為といえる美名の下に其の慾望を充たし或は私憤を晴らさんとす、大学派と北里派との間に於ける多年の衝突も表面上こそ学問上の論争なれ、其裏面に於ては一道の暗流あること、蓋し之を看取るに難からざるものあり、両派の間に通ぜる暗流の激する所、即ち学問上の衝突となりて現わる。然れども吾人は這般暗流の波瀾曲折を描出するを好まず、此の如きは寧ろ他の操觚者流に譲るを可なりとせん。唯だここには其表面上に現出せる両派の学問的衝突に就て、之を歴史的に敘述し、併せて吾人の批判的觀察を附記して大方博雅の一祭の料に供せんと欲するのみ。

## (一) 衝突の濫觴——脚気菌に対する攻撃

吾人の知る所を以てすれば、両派の学問的衝突は今を距ること既に二十九年前の昔即ち明治二十一年の頃に初まる、而して其衝突の対象たりしものは即ち緒方正規博士の發見せし所謂『脚気菌』なりき、当時緒方博士は細菌学

の一大權威と仰がれ、勢威隆々一代の学界を圧するの概ありき、蓋し吾国の細菌学は初めて緒方氏によつて輸入せられたると、当時は尚お創設時代に属することとて緒方氏の指導に待つもの頗る多かりしが為めなり、此の如き時に當りて細菌学の明星たる緒方氏より吾国民病の一たる脚気病の病原菌を発見せりとの報告出ず、誰か之を信ぜざるを得んや、時維れ明治十九年（千八百八十六年）なりき。

然るに右の報告に対する駁文は端なくも千八百八十八年の一独逸医事雑誌に出で、其翌年『中外医事新報』第二百十二号（明治二十二年一月十五日）の巻頭に記載せられぬ、題して『緒方氏の脚気バチルレン説を読む』という、借問す其の署名者は誰ぞや、曰く当時柏林のコッホ研究所に在学せし少壮の一細菌学者北里柴三郎といえる新進の医学士なりき、請う吾人をして先ず緒方氏の発見せりといえる脚気病原菌なる者の梗概を記せしめよ。

緒方氏の報告に曰く、脚気患者の血液を始め、腸内容物、脊髓及び他臓器内には、脾脱疽菌に酷似して而かも之よりも小なる一種の桿菌あり、就中腸内容物中に於て多く群在し、エールリツヒ氏結核菌染色液中に入れて後グラム氏法を施す時は、善く着色するの性あり、是れ他の細菌に認めざるが故に、此法に依りて他種の細菌と識別するを得べし、今脚気患者の指頭を刺して血液を採り之を膠質培養基に穿刺すれば、其表面に浮翳を生じて膠質の液化を来たし、寒天培養基上には灰白色粘著性の聚落を形成す、鏡検するに長き線條相錯綜し其の各末端は鈍円にして、其の内には円形の芽胞様物を生ず、而して葡萄糖を加えたる膠質培養基に発育せしむる時は強酸性の反応を呈す、之を化学的に検するに、乳酸に近似する酸を形成するものの如し、此の培養を動物に接種すれば、脚気様症状を發し、後肢に知覚異常及び麻痺を来たし且つ浮腫を呈す、動物を解剖するに、其腸内容物中には同一の桿菌を認むと。上記の所見に徴して断案を下して曰く、脚気菌は小腸内に発育して酸を産生し以て脚気病を發起す、故に脚気を治療するには須らく先ず此の酸類の發生を防ぐが為に亜爾加里性の薬剤を与え、以て患者の腸内容物及び血液の酸性を中和せざるべからずと。

緒方博士の発見したりといえる脚気菌の性質及び脚気の病理説は実に此の如き者なりき、之に対して当時尚お無名の少壮学士たりし北里氏は奮然として立ち、<sup>ドイツ</sup> 独逸の一医学雑誌に書を寄せて抄録の名の下に論駁を試みたりき、曰く抄録者は緒方氏の説に左袒すること能わ<sup>あた</sup>ず、エールリツヒ氏結核菌染色液とグラム氏法との複著色法とは決して緒方氏の所謂脚気菌のみに特有のものに非<sup>あら</sup>ず、又た同氏は単に其培養のみを以て動物試験を行い、脚気患者の血液或は其他の臓器を之に応用せざりしは実に誤まれるも甚だし、何となれば、同氏の法を以てすれば、血液も亦た桿菌と等しく試験動物に対して同一の発病性の性質を有するか、<sup>は</sup> 将た又た接種したる桿菌の真に患者の血液より由来したるやを知ること能わ<sup>あた</sup>ざればなり、而して同氏の説く所の脚気患者の血液の酸性反応及び療法に至ては敢て論難を下すの要なしと。(中外医事新報第二百十二号紙上に於ける訳文に拠る)

明治二十二年新春の『中外医事新報』の巻頭に上記の如き北里氏の反駁文の現われしは、<sup>ドイツ</sup> 独逸の医学雑誌に原文の出でし日より遅ること数ヶ月の後なりき、そは北里氏の中外医事新報社に寄送せし別刷の如何なる間違いにや、中途にして紛失し同社に到着せざりしが為め掲載の遅くれたるにて、北里氏より何が故に掲載さざるやと詰問せられて始めて驚き、同時帰朝せし片山氏に原文を請い漸<sup>よつや</sup>く之を訳載するに至りしなり、こは枝葉の事なれども、特に之を記述せし所以<sup>ゆえん</sup>のものは、北里氏が同社に寄せたる詰問書の内容を示さんが為めの前提に他ならず、而してこの詰問書は、当時年壮気鋭の新進学士北里氏の真面目を發揮したるものにして、学問の前には先輩後進の別なき所以<sup>ゆえん</sup>を痛論し、之を読む者をして、覚え<sup>あ</sup>ず跪坐襟を正うせしむ、嗚呼<sup>ああ</sup>当年の北里氏は実に此の如く気概に富める真摯熱血の学者なりき。

(前略) 貴社に一言したきことあり、本年の春の頃、小生は緒方氏の脚気病原発見説の甚だ誤謬多く、右の発見を以て脚気病原と看做すこと能わ<sup>あた</sup>ざるの理由を当国の新紙へ掲載し、右の別刷を一部貴社へ進呈致置候、然るに彼の論説を今日に至るまで御記載なきは如何の理に候や、相伺い度候、(中略) 小生は我邦医学の進歩の

為め大に悲嘆<sup>つかまつり</sup>仕候、学問上の争は所謂<sup>いわゆる</sup>君子の争にて、其説を非と見る時は父子兄弟師友の間と雖、決して憚<sup>はばか</sup>る所なく世に向つて駁撃するは是れ学者の一大義務に候、然<sup>しか</sup>るに之を憚<sup>はばか</sup>りて思ふ所を述べざるは、学者の大に恥ずる所なり、(中略) 貴社幸いに我邦医学の誘導者となり世に向て新誌を発兌せらるる以上は、学事上の内情などとて一個人のために束縛せらるるが如き卑屈、心を脱し欧米文明国と新紙と対峙するの精神にて御奮発あらば、小は以て貴社の為め、大は以て国家の医学の為め大に益する所あらんと思考<sup>つかまつり</sup>仕候、右に就ては定めて御高説のあることならんと存知候間、御手紙にても、又は新報紙上にも御答弁あらんことを乞う

明治二十一年十月十七日

北里柴三郎拜

中外医事新報社御中

実に正々堂々の文なり、学者を以て任ずる者這般<sup>しゃはん</sup>の意気なかるべからず、当時北里氏は独逸<sup>ドイツ</sup>の一留学生に過ぎず、而かも神聖なる学問の為めには、其先進にして且つ恩師たる医科大学教授緒方正規博士を眼中に置かず、椽大<sup>てんだい</sup>の筆を揮つて、其の所説の誤謬を赤裸々に摘発し、学界を警告したる気概と勇氣とは、実に敬服せざるを得ざりき、想うに当時北里氏は、中外医事新報社同人が緒方博士の勢威に畏れ且つ大学に対する情実に牽制せられて、自己の駁文を掲載するに躊躇せるものと思惟せしなるべく、之に対して一喝を加え、学問上の争には父子師弟間に於ける私情をも犠牲に供せざるべからざる所以<sup>ゆえん</sup>を痛論したりしは実に意気一世を空うするの慨ありき。

然<sup>しか</sup>るに世人の中には北里氏の駁文を見て、忘恩の徒なりと罵る者少なからざりき、森鷗外氏の如き当時新進気鋭の医学者さえ、『北里は識を重んぜんとする余りに情を忘れたり』とまで論ぜしことあり、(『東洋医事新誌』第五百八十四号、明治二十二年六月)、請う之に対して遥かに森氏に寄せたる北里氏の書信の一片を読め。

(前略) 貴説によれば、小生は識を重んぜんとする余りに果ては情を忘れたりとの事に候、成程御説は一応最ももの様に候え共、こは未だ生の深意を御洞察<sup>なせられ</sup>被成たりと云う訳に至り兼ね候、生は情を忘れたる者に非<sup>あら</sup>ず、私

情を制したるものなり。(中略)

真の学理を研究し、我邦の医学をして歐洲の医学と対峙せしめ、後の学者をして憫笑せしめらざしめんと欲する者は、学問のためには私情を棄てて公情を取り、以て我邦の医学を岐路に陥らしめざる様注意すべきの秋と存じ候、小生は右の主義を固く守りて動かず、我学のためには一身を犠牲に供するも尚お且つ之を辞せず、況んや私情を制する位の瑣々たる少事に於ておや、世人生を呼んで癩となし狂と称し、恩少く徳に背むけりと云うも、そは世人の評に任せん、独り嘆息するは我邦の医学真道を踏み迷うて岐路に陥らんとする傾き今日に現われたるを之れのみ云々。

明治二十二年八月五日

柴 三 郎 拝

森林太郎足下

(東京医事新誌第五九九号)

侃諤の論、森巖の説、世の俗物小人をして愧死せしむ。而かも当年の北里医学士と、今日の北里博士とを対照すれば、誰れか其の懸隔の千里の差も啻ならざるに驚かざるを得んや、嗚呼明治二十二年当時の北里氏は、真に学を思い道を守る新進学者なりき、学問のためには、師弟間の私情をも擲ち、其説に殉ずる熱烈の学究なりき、然るに今日の北里氏は如何、黄金の爲めには学問を売るも敢て辞せざる学商に非ずや、吾人は伯林留学時代の北里学士の面影を偲ぶ毎に、今日の北里博士に想倒し、恍として隔世の感に打たれずんば非ず。そは兎も角、北里氏が緒方博士の脚気病原説に対して初めて切りたる火蓋は、実に後來に於ける大学派と北里派との衝突の導火なりき、緒方博士が其の後進たる少壯の学士北里氏の放ちたる一矢によりて受けたる創痍予想外に大なりしことは、当年の時勢に徴して之を想察するに難からず、蓋し当時の緒方氏は吾国唯一の大細菌学者にして其の言説は九鼎大呂よりも重しとせられき、然るに其の門下生の一人北里学士の反駁に逢いて之に応酬すること能わず、空しく恨みを吞みて沈黙す

るの已むを得ざるに畢んぬ。其の遺憾知るべきなり。緒方氏の北里氏に啣むに至りしもの蓋し『脚気菌』事件に初まり、又北里氏が緒方氏を以て齒するに足らずとなし心潜かに冷笑するに至りしもの、亦た此の事件に胚胎す、此の如くにして大学派と北里派との衝突史の序幕は初めて開かれたりき。

## (二) 第二回の衝突——赤痢病原問題

明治十九年以降約六ヶ年間独逸の柏林に留学し研学の労を積みて後、幾多の業績を齎して北里氏の錦衣帰朝せしは実に明治二十五年の五月なりき、之より先き独逸政府は同氏に贈るに名誉「プロフェッソル」の栄称を以つてし、又た英国のケムブリッジ大学を始め北米合衆国の諸大学は争うて同氏を招聘したりとのことなりしを以て、新帰朝者北里氏に対せる朝野人士の憧憬と崇拜とは殆ど喩えんに物なく、児童走卒の輩に至るまでも其の名を知らざるは無く、一世の大医学者とし云えば直ちに先ず同氏に指を屈するが如き有様なるが上にも、空前の特典を以て一躍勲三等に叙せられしかば、同氏の名望は愈々高く、其の威名の赫々たりしこと、恰かも旭日の東天に冲するの慨ありき、今日より之を想うに、北里氏の最得意時代は実に帰朝前後の頃というべく、其の意気揚々として長安の大道を闊歩したるの状、実に他の学者をして羨望に堪えざらしむのものありき。

然れども帰朝後に於ける北里氏の社会的地位に至つては学者としての名声頗る世に高かりしにも拘わらず頗る不安固の状態にありき、蓋し同氏の如き世界的学者は須らく之を大学に迎えて当時の新学科たる細菌学の教授たらしむべき筈なるも、同氏の先輩たる緒方氏は既に衛生学教室の主任教授たるを以て、北里氏を容ること能わず、又他の一面に於ては大学教授の多くは其後進たる北里氏の名声赫々たるを見て、心平らかならざるものあり、此の如き事情ありしを以て、いかに朝野の崇拜を一心に集めたる同氏と雖、容易に地位を獲ること能わず、不平失望の念絶えず胸裡に往来したりしなるべし、ここに於てか一代の学侠福澤諭吉先生は奮然蹶起し北里氏のために私財を擲ち

て私立伝染病研究所を設立し、次で当時衛生局長たりし後藤新平、長與專齋氏等の援助によりて大日本私立衛生会より之に補助金を支出することとなり、始めて北里氏をして其の手腕を揮うを得せしめたりき、此の如き際に当りて大学側の諸氏の北里氏に対する態度如何と見るに、頗る冷淡を極め、自から進んで援護の労を執る者としては殆ど無く、新設の私立伝染病研究所寄附金募集の挙に至ても多くは大学以外の人々の盡力に待たざるべからざりき、是れ蓋し大学派の嫉妬的感情に基づきしものならんも、亦た北里氏が独逸留学時代に於て緒方教授に反抗し、治すべからざる創痍を負わせて大学の権威を失墜せしめたりし事も亦た与つて力ありしや疑を容れず。

此の如くにして北里氏は主として民間の士の努力によりて伝染病研究所を新設するを得、大学とは全々没交渉なりしかば固より之に恩誼を負わず、加之在独時代の頃より夙に大学側を見縊り、碌々の徒何ぞ能く為さんと呑んで掛りしこととて、最初より其眼中に大学の無かりしや明かなり、既に伝染病研究所の城廓成る、医学界に於て最早や畏るるに足るものなし、請う今後に於ける乃公の技倆施設を觀よとは蓋し當時に於ける北里氏の抱負なりしなるべく、伝研移管に至る迄凡そ十数年の間、大学派と氷炭相容れざりし所以のもの、夙に伝研新設の当時より両者間に意志の疎通を缺き、感情の乖離せしに基つかずんば非ず。然りと雖、北里氏の帰朝後、始めて大学と学問的に衝突せしは、赤痢病原問題にありき、予ねて緒方教授を見縊れる北里氏は、教授の九州地方に於て赤痢患者及び病屍より発見せりといえる所謂赤痢菌に對し、口を極めて攻撃し、殆ど学問的価値を有せざる者の如くに嘲笑せり、是れ実に北里氏と緒方氏との間に於ける第二回の衝突にして、之によりて両者間の感情の益々隔離したるこそ是非なけれ、請う吾人をして赤痢病原に関する論争の一斑を説かしめよ。

明治二十五年、全国の諸地に赤痢病の大流行あり、緒方正規博士は、当時尚お不明なりし同病病原を研究すべく九州の流行地に出張し、赤痢患者の糞便及び大腸潰瘍内にグラム氏法にて脱色せざる一種の短桿菌を発見せり、該菌は膠質培養基を液化する性を有し、之を動物に注射すれば粘液性軟便を漏らし大腸に潰瘍を生ず、又た之を食物



に混じて猫に与うるも、粘液便を瀉下し、剖検するに大腸に潰瘍あり、緒方氏は此の如き事実に徴して右の短桿菌を赤痢病原なりと認め、之を世に公にせり。(明治二十五年六月)

然るに其後北里博士も大阪医学校長兼大阪私立衛生会頭清野勇氏の依頼に応じて大阪に下り、同地に於て赤痢病原の研究に従いしが、やがて旬日の後之を終了し、其の研究成績を大阪私立衛生会の席上に公表せり、其説に依れば赤痢患者の粘液血便中には「アメーバ」を認むるも、特異の細菌を証明せず、又緒方氏の発見せりと云える短桿菌をも認むること無し、思うに「アメーバ」こそ赤痢の病原ならんと。

此の如く緒方、北里両氏の赤痢病原に関する意見の全然一致せざりしかば、一般医家は其適従する所に迷えり、然れども新帰朝の世界的医学者として其の威名中外を圧し、朝野の憧憬する所となれる北里氏の説に重きを措きしは固より自然の傾向なりき、北里氏の大阪私立衛生会に於て其の研究の結果を講演するや、口を極めて緒方氏の細菌説を冷罵し、嘗て歐洲に於ける虎列刺流行の際、大腸菌を虎列刺菌と誤認して学界の笑い物となりしエンメリツヒの例を特に引証し、緒方の発見せりと称せる赤痢菌も亦た此の如き類なるべしと揶揄して聴衆を失笑せしめ、且つ緒方教授の名を呼び棄てにして『緒方が緒方が』とケナシつけ、『緒方と云つても当地の緒方氏のことでは無い、大学の緒方のことである』と別に注意するの要もなきに、わざと緒方教授なることを意味ありげに言明して、又たもや聴衆を笑わしめたり、北里氏の眼中に緒方氏無きこと此の如く、公然同氏を嘲笑して意とせざりしこと又此の如し、いかに学問上の論争とは云え、公会の席上に於て、大学教授にして且つ自己の先進たる緒方氏をば、さながら無能無識なる腐儒と云わん許りに翻弄揶揄せしは、心ある者をして顰蹙せしめざるを得ざりき、されば、之を耳にしたる緒方教授の如何に激憤せしかは、蓋し想察するに余りあり。

緒方氏の細菌病原説、北里氏の「アメーバ」病原説共に誤謬なりしことは後日に至りて分明となり、いずれにも団扇を挙ぐること能わざりしも、此の第二回の衝突ありてより以来、緒方氏が北里氏に啣む所愈々著るしくなりし

は想像するに難からず、又た緒方氏以外の大学側の人々にありても、北里氏が傲慢不遜にして其の先進たる緒方氏を凌辱するのみならず、江湖の信用と憧仰とを一身に集め、自から高く世界的学者を標榜して傲然医界を睥睨しつつあるの状を見、面憎しとの感に堪えず、いつか好機会あらば、彼が高慢の鼻柱を打ち挫き呉れんと腕を扼して待ち構えし折柄、北里氏の実扶的里及び虎列刺血清療法ジフテリリアの報告世に出でぬ、当時大学の別働隊たりし中濱東一郎博士は、奮然として立ち激烈なる駁文を公にして、天上天下唯我独尊をきめつつありし北里氏の鼻柱を物の見事に打ち挫きぬ、之を第三回の衝突となす、請う其の梗概を左に語らん。

本篇は明治大正医史の一材料ともなる者なれば、特に冷靜の態度を取り、兩派の一方に偏すること無く、ありのままに記述して、之に聊か余輩の公平なる批判的觀察を加うることとなせり、万が一其の記する所觀る所にして粗漏誤謬あらば、示教あらんことを望む、事実を重んずる余輩は之を訂正するに吝ならざるなり、但し余輩に示教せらるる際には、必ずや、確實なる材料を挙げ、且つ宿所本名を明記して責任を負われん事を希望す。

### (三) 第三回の衝突——北里氏の実扶的里及虎列刺血清療法報告に対する論難

明治二十八年の末、北里博士は実扶的里ジフテリリア及び虎列刺血清コレラの治療成績を報告し、其の論文中に於て、先ずベーリングと二人にて実扶的里免疫方法を発見したることを述べ之を血清療法らんしやうの濫觴なりとして自己の功績と鼓吹し、其の証左として、千八百九十年十一月刊行の独逸医事週報ドイツに公にしたるベーリング連署の論文を以てし、又た虎列刺血清療法コレラの成績を述ぶるや、動物に対する血清試験はバイフェル及びランソンの二人を始めとすれども人間に之を応用したるは自分を始となすと云い、進んで其の治療成績の顯著なることを統計上より証示して、血清療法以外に虎列刺療法なしと迄言明したり、北里博士の隆々たる声望に眩惑せる者豈之を信ぜざるを得んや、然るに其翌年の初頭、当時大学派の一驍將ゆうしやうたりし中濱東一郎博士は、書を『衛生新報』に寄せ、北里氏の報告の虚偽杜撰にして毫も信ずるに足らざる所以を論じ、北里氏に対して痛烈なる攻撃を加えたり。

中濱氏は実扶的里血清療法発見の歴史を精叙し、該療法の創意者はベーリング及びフレンケルなること、又大動物を免疫たらしめたるはベーリング及びウェルニツケなることを指摘して、北里氏は毫も之れに關係せしこと無しと論断し、北里氏の自ら引証せる独逸医事週報中の論文は、却て同氏の実扶的里免疫の研究に何等関与せざりしこと及び其の免疫方法の如きも同氏の創意発見に非ることを明記せりと説き、更に進んで北里氏の伝染病研究所にて製造せる実扶的里血清免疫単位の甚だ低くして、ベーリング氏製造の血清の最微弱、所謂第一号よりも遙かに劣れることを喝破せり、次で論鋒を虎列刺治療血清に転じ、北里氏以前既に人体に同血清を用いたる者ありしことを挙げ、虎列刺血清を始めて人身に応用せる学者は決して北里氏に非らずと痛論し、更に百尺竿頭一步を進めて、北里氏が『何れの統計に徴するも、虎列刺の死亡比例は凡そ七十%内外なり』といえるを駁し、各国の虎列刺病死統計を一々引証して其の死亡比例の五十%内外なることを明かにすると共に北里氏の虎列刺血清治療報告の甚だ杜撰なることを非難し、毫も血清の有効を証明するの価値なしと論ぜり、中濱氏は北里氏の患者全治及び死亡統計に徴し、血清使用患者の死亡数は僅かに三十三、一%なるに、普通療法を施せし患者死亡数の九十六、一%に達せるは実に意外なりとし、論じて曰く、普通治療患者七十七名にして其中七十四名の死亡者（九十六、一%）あり、いずれの流行にも古今其数を見ず、虎列刺普通治療にして此の如き大多数の死亡者あるは世界広く万国多しと雖、広尾病院のみと云わざるを得ず、余は、重症患者には血清療法を施さず、軽症患者にのみ血清療法を施されしならんことを考うと、此く論じ来て根本的に北里氏の報告を否定し、『北里氏の成績は未だ其効ありしことを証明するものに非ず、余は唯同氏の完全にして且つ確実なる実験の世に出でん日を翹望す』と云い、北里氏に対して最後の止めを刺せり。

中濱博士の鋭利明截なる駁文は、北里氏の急処を衝きて一敗地に塗れしめたり、帰朝以来傲然吾医学社会を眼下に見下し天上天下唯我独尊を気取りつつありし北里博士は、始めて中濱博士によりて其の権威の幾分かを剥脱せられしぞ是非なけれ、此くして大学派の驍将中濱氏は物の見事に北里氏を倒し、緒方教授に代わり復讐を遂げ、教授

が積年の無念と遺恨とを晴らしぬ。

中濱氏立つ、緒方教授の門下生にして多年腕を扼せる者豈亦た奮起せざるを得んや、当時教授の古参門下生の一人に安原豊なるものあり、人格上の非難あるが為め、先進僚友間に容れられざりしも、亦た一の俊才にして且つ語学に長じ邦文を善くし、北里氏に対して真正面より学問的攻撃を試むるには実に屈強の戦士なりき、果然彼は『医海時報』に長文の稿を寄せ、諸種の独逸医学雑誌を引用して、北里氏の決して実扶的里血清療法ジフテリアの発見者に非る所以を多数の文献上より証明し、北里氏の仮面を剥脱したり、其の文章の雄健奔放なる、記事の確實周到なる、実に当時に於ける杏林論壇の一偉観にして、遺憾なく北里氏の自称血清療法発見者たることを抹殺し去りたるには、流石さすがの北里氏も顔色なかりき。

中濱、安原二氏の蹶起して自他共に世界的大学者と許るせる北里氏に学問的致命傷を与え、少くとも江湖の過信するが如き至高の医学者に非ることを具体的に立証してより、知識階級は漸く北里氏に信を措かざるに至りしのみならず、赤痢「アメーバ」病原説、恙虫病「プラスモヂエン」病原説の誤謬失敗なることも逐い逐い明白となりしかば、流石世に時めきし北里博士の学問界に於ける声望權威も漸次失墜するの状を呈するに至りしこそ、又た是非もなき次第なりき、されど同氏の巧妙なる処世的手腕は能く帰朝当時前後の信用と名誉とを維持し、且つその部下に有為の俊才を網羅して大学を圧倒するの勢いを示せしかば、仮令い一部分の知識階級の間には最早や北里氏に重きを置かざる者ありしも、多数の医家及び世俗の徒は依然として北里博士を一世の碩学大医と信じ、伝染病研究所の城壁は年を逐うと共に益々強固となり博士の社会的地位も亦従つて愈々向上するのみなりき。

#### (四) 第四回の衝突——「ペスト」菌問題

上記第一回より第三回までの衝突は、言わば小衝突にして、学界に一大波瀾を起すまでの程度に至らずして止み

しが、然るに明治三十二年の夏「ペスト」病検査方針の中央衛生会に議せらるる前後に至りて始めて大学派と北里派との間に一大衝突起り、学問界は勿論一般社会の視聽を聳動せしめたり、而て其結果遂に北里博士の大敗北に歸し、多年遺恨骨髓に徹したる大学派は始めて三斗の溜飲を下げたり、之を第四回の衝突となす。

明治二十七年北里博士が香港に於て「ペスト」病の患者屍体より一種の複球菌を発見し之を病原として世に報告せるの後、幾許くもなく、仏国の一学士エルザンも同じく香港に於ける「ペスト」患者より発見せし一種の桿菌を報告したり、然るにエルザンの菌と北里菌とは、其形態性状を異にせしに拘わらず、最初の間は両者共に同種の者と認められ、北里氏の報告を疑う者とても無かりしに、明治二十八年に至り始めて北里菌を以て真の「ペスト」菌に非ずと為し、同氏に反対せる有力の論者現われたり、其人を誰とかなす曰く、北里博士と手を携えて共に香港に航し、「ペスト」の病理解剖学的研究を担任し不幸にして同病に感染せしが、漸く一命を全うして帰朝したる青山博士是れなり。博士は『大学紀要』に掲げたる「ペスト」病論に於て、北里が血液中に看出して病原を称する一種の複球様桿菌は、其実原発局所の末梢淋巴腺病竈内に混在せる連鎖球菌の其列を離れて血中に移行せしものならんとの意見を載せたり、これぞ大学派が北里派に対して始めて挑戦の火蓋を切りたるものと云うべく、之に次で岡田國太郎博士は明治二十九年、東京医学会に於て台湾の「ペスト」患者より獲たる「ペスト」菌の性状を詳説し、エルザン菌と全然一致せることを論決するあり、其翌年には緒方正規、山極勝三郎両博士の台湾「ペスト」の研究報告世に公にせられ「ペスト」真病原のエルザン菌にして、北里菌の全然病原学的価値なきことを確実に証明したり、此の如くにして北里博士は大学派より続々攻撃せられ、之に加うるに、ドイツオーストリア 独 塊よりボンベーに派遣せられし研究委員も亦たエルザン菌を病原菌と認定するあり、北里氏たるもの、豈孤城落日の感なきを得んや、若し其当時同氏にして潔よく其所説を擲ち、学者らしくエルザン菌を是認せしならんには、大衝突も起らず、又た同氏も其面目を全うして、平和に病原問題を解決するを得たりしならん、然るに事ここに出でず、飽迄自説を墨守し、エルザン菌

を非定せしのみならず、伝染病研究所長たるの權威と、世界的学者たるの名声とを楯に取りて内務省当局者を動かして、海港検疫の方針として、エルザン菌以外に北里菌をも証明すべきことを規定するに至らしめ、積年の暴威を国家衛生機関の上にも振りたりしかば、此に於てか再び緒方正規博士及び中濱東一郎博士と衝突し、普通新聞紙上にも記載せられて、江湖の耳目を聳動せしめたり、今其の顛末を左に記せん。

時維<sup>こ</sup>れ明治三十二年の七月、中央衛生会は、「ペスト」病予防のため船舶検疫に関する方針に就き諮問せらるる所ありき、其の問題とする所は、検疫上、北里菌を発見し、又はエルザン菌を発見する時は勿論、其中いずれをも発見せざる時と雖<sup>いへども</sup>、臨床上「ペスト」の症候あるか或は擬似症候ある時、停船処分を行うの可否如何と云うことにありき、其の席上の於ける委員緒方正規博士の質問及び所論は実に痛快激越を極め、北里菌の決して真の病原菌に非<sup>あらざ</sup>ることを言明して北里氏の頭上に三斗の冷水を浴びせ、遂に北里氏の意見を拒斥して、自説を貫徹したり、温厚の君子人たる緒方博士が、此くまで勢猛く突き込み、満場の人をして手に汗を握らしめたるを見ても、如何に當時北里氏に啣<sup>く</sup>む所大なりしかを洞察するを得ん、請う左の記事を読め、

○緒方委員（番外柳下氏に質問）

内務省にては、「ペスト」菌に、北里菌エルザン菌の二種ありと認むるや

○番外柳下氏

海港検疫所より「ペスト」患者に北里菌あり或はエルザン菌ありと報告あるを以て二種ありとせり

○緒方委員

いずれの検疫所より該患者に北里菌あり、何れの検疫所よりエルザン菌ありと報告せしや

○番外

一々記憶せず

## ○緒方委員

北里委員に質問せん、貴君は香港に於て「ペスト」患者に発見せる菌を眞の「ペスト」菌と信ぜらるるや、又た欧米学者にして貴君発見の菌を「ペスト」病原なりと証明せるものありや否や、弁明を乞う

## ○北里委員

余は該菌を眞病原なりと確信し、然ども尚お「ペスト」患者にエルザン菌あるは信ずる所なり

## ○緒方委員

欧米学者中、所謂北里「ペスト」菌と、エルザン「ペスト」菌とを同一視せるもの多かりしが、青山氏は両菌に区別あることを唱え、岡田氏は両菌の性状全く相異なるを公にし、北里氏亦た自ら両種の異種なることを報告し、余及び山極氏はエルザン菌こそ眞の病原たるべきことを証明せり、又た一昨年伯林<sup>ベルリン</sup>滞在中、幸いにして独逸<sup>ドイツ</sup>の「ペスト」研究委員の印度より帰国せるあり、一日該研究委員バイフェル氏を伯林<sup>ベルリン</sup>伝染病研究所に訪問し、面会して談話せしに、バイフェル氏曰く、貴国の北里氏は先年香港に「ペスト」研究に赴き、如何なる事をなせしや、「ペスト」患者に就き、其病原の「ペスト」菌を発見すること敢て難事<sup>あたひ</sup>に非るに、彼の如く誤謬をなせしは、実に怪訝<sup>けげん</sup>に堪えざる所なり、又た先年北里氏よりコッホ氏に送附せし「ペスト」患者血液より製したる標本を鏡検せしに、眞の「ペスト」菌なく唯連鎖菌のみ在りしと云えり、又た最近出版のギユンテル氏細菌学書にも、余の「ペスト」研究成績を掲げ、元来北里菌とエルザン菌とを同一視し混同せしを、明瞭に両菌全く相異りたるを論じ、「ペスト」病原菌は、エルザン氏一人の発見に帰すべしとなせり、云々

緒方委員は前述の理由に基づき、原案を左の如く修正したしと述べたり、曰く

「ペスト」予防のためにする船舶検疫に關しては、鏡検上「ペスト」菌を発見したる時は勿論、之を発見せざるときと雖<sup>いへども</sup>、臨牀上「ペスト」の症候あるか、又は疑わしき症候ある時は停船の処分を行うを可とす

右の討論終結に至り、会長採決せるに、多数を以て緒方委員の修正説に議決せり（東京医事新報第千二百二十六号明治三十二年十一月）

中央衛生会の議決此の如し、ここに於てか内務大臣は之に従い、直ちに訓令を発せしに、間も無く咄々怪事のこと起りたれ、何ぞや、当時の衛生局長長谷川泰氏が七月十日の日附を以て、右の議決を蹂躪したる通牒を各検査所に発せしこと是れなり、其の文に曰く

「ペスト」予防の爲にする船舶検査に關し、訓令相成候処、該訓令中、「ペスト」菌とあるは、北里菌又たはエルザン菌の何れを發見したる時のことにてと云う趣旨に有之候條右の方針を以て、予防上遺憾なき様御措置相成度候云々

是れ豈中央衛生会に於て議決したる精神を無視し、緒方博士の修正説を破壊したる無法極まる措置に非ずや、抑も長谷川衛生局長が此の如き奇怪の行動を取てせしは、何の爲めぞ、これ畢竟北里氏と氣脈を通じて大学派の裏をかくと共に北里氏の声望名譽を維持せんとしたる苦肉の策略に出でしなり、明治三十二年十月三日刊行の『日本』新聞の記事は、其の消息を道破して殆ど余蘊なし、されば之に抛りて其の梗概を記せんに、抑も「ペスト」検査方針に關する諮問案の中央衛生会に提出せらるる迄には、衛生局内に大方ならざる争論を生じ波瀾曲折を極めたりき、即ち当時検査上の訓令を發するに就き、之を中央衛生会に諮問すべきや否やに關して、長谷川局長、窪田参事官及び北里伝研所長等は齊しく諮問の必要なことを主唱し、種々の手段を講じて極力諮問を妨げんとせしが、之に対して柳下防疫課長は絶対的に其の不法なる所以を論じ、劇論數回に及びたるに、固より是非の明かなることとて、北里及び長谷川氏等も飽迄我意を貫くこと能わず、遂に中央衛生会の議に附することとなれり、当時北里氏及び長谷川局長の口を揃えて諮問するの要なきことを力説せし所以のものは、北里氏の發見したる菌をして「ペスト」診断上の一要件たらしめんと欲し、爲めに同会に於ける大学派の攻撃を回避せんとすの計略に出でしなり、されば長谷川



衛生局長が、其後中央衛生会議決の精神を無視せる奇恠きがいの通牒を發せし原因も容易に想察するを得べく、決して偶然の誤解過失に出でたるに非あらずして、故意に深く凶る所ありしが為めなり。

北里氏が長谷川局長と結託して、大学派の裏をかき、北里菌、エルザン菌いずれにても、之を發見したる時は「ペスト」病と診断すべき旨、各海港検疫所に通牒を發したるは、之を学問上より論ずるも、將はた防疫上の措置より觀るも、実に不法非理極まれる行動と云うべく、自己一身の名譽を維持せんが為め、国家の衛生機関に干涉し、飽迄我意を貫かんとせしが如き、専恣横暴も亦た甚だしと云わざるべからず、加之しかのみならず、普通新聞及び一部の医事雑誌をして、中央衛生会の議決と全く相違せる記事を掲げしめ、同会にても視診と血液検査とによりて「ペスト」を診断すべき旨議決したりと虚偽の報導を為さしめ以て北里菌の病原的価値を保留すべく企てたり、何ぞ其の態度の卑怯未練にして、其行動の陰險陋劣なる、此の如き無法非理なる措置は固もとより許さるべくも非あらず、当時仏国に在学せし海軍軍医監矢部辰三郎氏は普通新聞に記載せる中央衛生会の議決案（即ち虚偽捏造の記事）を読み一言なき能あたわずとなし、遙かに母国の医事雑誌に書を寄せて歐洲諸学者の悉ことごとくエルザン菌を病原菌と認定せることを述べ、唯だ日本に於て北里及び其門下生の北里菌を病原とするのみなりと論じ、中央衛生会の反省を促せり、ここに於てか緒方正規博士は、普通新聞及び医事雑誌上に中央衛生会に於ける會議及び議決の詳細を發表して、新聞記事の妄誤を正し、次で中濱博士も亦「ペスト」病原發見の桂冠は独りエルザンの戴く所にして、北里氏の旧僚高木友枝氏の賛同を見るのみなる北里菌の決して病原に非あらずすることを力説し、緒方氏の修正説に同意なるを説けり、此の如くにして、流石さすがに北里氏の苦肉の計策も物の見事に破れしのみならず、知識階級の反感を買かいて徒いたらに嘲笑罵声の裡に葬くむられしぞ笑止なる、毛を吹いて疵を求むるとは、蓋けだし此の如き事をや云うなるべし。

抑も当時そのときに於ける医学会の状勢を回顧するに、北里氏の發見せる所謂「ペスト」菌なる者の病原的価値は殆ど之を是認する者無く、北里氏は四面楚歌に包圍せられたるにも拘かわらず、執拗にも自説を維持するに腐心し、其結果、

長谷川衛生局長と氣脈を通じて、中央衛生会の議決を蹂躪したる通牒を發せしめ、見んごと、大学派に背追い投げを喰わさんと謀りしは、実に政略家たる北里の本色を發揮せるものにして、自己一身の名誉を維持せんが為めには、何物を犠牲に供しても憚らざる彼の度胸を赤裸々に暴露したるものと謂うべし、然ども是れ豈學者を標榜する者の行動ならんや、彼は此の如き非學者的措施に出でて、飽迄も其の信用と名望とを繋がんを欲せしも、如何せん真理の前には遂に屈從せざるを得ず、明治三十二年の初冬に至り神戸市に始めて「ペスト」患者の現わるるや、流石傲岸不屈なる北里氏も到底其の非を押し通おすこと能わず、遂にエルザン菌の病原たることを是認するの已むを得ざるに至れり、噫亦た命なる哉。

当時北里氏と共に神戸の「ペスト」病患者に就て研究したる緒方中濱二氏の調査報告を読み、次で北里氏の報告を読めば、一は得意満面、他は意氣銷沈、実に絶好の「コントラスト」なるを失わず、中濱氏の報文中の一節に曰く「ペスト」病原は、エルザン氏の発見したる菌なるは學者間の輿論にして、独り本邦に於ける多数の研究者が之を是とするのみならず、歐洲多数の菌學者病理學者等又た之を確認するに拘わらず、伝染病研究所長北里柴三郎氏は自己の発見したりと稱する一種の細菌を以て病原となし、又た長谷川衛生局長は、中央衛生会が本年七月六日の會議に於て決議したる旨意に反し、「ペスト」菌はエルザン菌及び北里菌を云う旨を各海港検疫所に通牒したることあるを以て、若し果して神戸市の急性病に於て北里菌と稱する一種の細菌あるを確認して「ペスト」なりと報ずるに於ては、是れ真正の「ペスト」に非ず、若し然らずして北里氏がエルザン菌を認めて以て「ペスト」と確定したりとすれば、予じめ北里氏は多年固く執りて動かざりし意見を棄却せざるべからず、然れども当時未だ北里氏が意見を変じたるの確報を得ず、依て實地に臨み、果して真性の「ペスト」なるや否やを確定するの要あり……

と云い、エルザン菌の病原たることを明かにしたりと断じ、又緒方氏は

神戸市に於て調査せる成績に依るも、エルザン菌に原因し、発病せる「ペスト」病たるを確定し得べしと信じ、北里博士と神戸に於て会合せし時、「ペスト」病毒は君等の説の通り、エルザン菌なるを知れりと余に話されたるを以て、「ペスト」病毒はエルザン菌と確定し、『北里氏も遂に同意す』との電報を緒方中濱の名を以て発したり

と特筆せり、其の意気揚々として勝ち誇れる大学派の鼻息の如何に荒かりしかを想察するに足るべし、之に對して北里氏の報告を読めば、聊か負け惜しみの觀あるも、大学派の前に兜を脱ぎたる敗將の面影は掩うに由なし、曰く今回神戸に於て極めて初期即ち香港に於て遭遇する能わざりし程度の患者に接し、其腺腫を検するに、實際エルザンの所謂グラム法にて脱色する細菌多く、或場合にては殆ど全く純粹に同菌のみを認むることあり、因て尚お調査を進めたる結果、エルザン菌が「ペスト」の原因たることを確認したり、但し本員の前に病原と認め居たる細菌も、所謂敗血症を發したる場合には大に作用する者の如し、云々

斯くして「ペスト」病原問題に於て、緒方博士は多年仇視したる北里博士を屈服し、凱歌を奏するを得たりき、其の得意想うべきなり、之に反して北里氏の胸裡果して如何、傲岸不遜、一世の大細菌学者を氣取りて大学派を馬鹿にせし北里博士も、今や一敗地に塗れて復た自説を固守すること能わず、真理の前には跪伏せざるを得ずと雖、己を屈從せしめたる大学派の得意満面の状を見ては、満腔の遺憾蓋し遣る方も無かりしなるべし、此の如くにして、多年結んで解けざりし「ペスト」病原問題の衝突も、北里氏の屈從に依りて漸く解決を告げぬ。

吾人の觀る所を以てすれば、「ペスト」病原問題は其表面上こそ純然たる学問的論争なれ、その裏面は、大学派と北里派との確執に基づく、而かも之が為めに学界に大波瀾を起し、果ては長谷川衛生局長の官威を籍りて北里氏を援護するに至り、益々火の手を高むるが如き勢を醸成せしは、其の曲直果していずれに在りや、吾人は言わんとす、是れ畢竟北里氏が過を改むるに憚り、飽迄伝染病研究所の威信と一身の名声とを維持せんと企てし傲慢執拗なる行

動の然らしめたる所なりと、蓋し北里氏の発見せし菌が明治二十九年以来諸学者の顧みる所とならず、又た独ドイツ 澳オーストラリアの細菌学者病理学者も齊しくエルザン菌の病原たることを認定したることは、当時既に北里氏の知悉せる所、然るにも拘わらず、例の負け惜しみ根性と目的のためには手段を選ばざる主義により、飽迄も其の非を押し通さんとし最初は中央衛生会に「ペスト」検疫方針に関する諮問案を提出するを無要なりとして之を妨碍し、事成らずして緒方氏の修正説の勝となるや、更に手を換えて長谷川局長を操縦し、中央衛生会議決の精神を無視せる通牒を發せしむる等陰に陽に種々の政略手段を廻ぐらせり、此の如く北里氏の眼中唯自己と伝染病研究所あるのみにして、国家衛生上重要なる検疫方針を蹂躪してまでも、自家の權威を維持せんとしたりしかば、遂に彼の如き一大紛擾を惹起し、大学派の追求に逢いて、其の弱点を暴露するの已むなきに至りしのみならず、やがて間もなく軍門に降らざるを得ざるが如き大蹉跌を招くに至りしなり、噫また誰をか咎むべき、学者たるもの須く之に鑑むる所無かるべからず、過を改むるに憚り、或は過と知りつつ是が非でも自我を發揮するものは、やがて嚙臍の悔あるべきこと、北里博士の如くなるべし、豈戒慎せざるべけんや。

### (五) 第五回の衝突——所謂竹内菌事件

明治三十二年「ペスト」菌問題に於て北里博士を屈服せしめ、凱歌を奏したる緒方博士は、戦勝の余威に乘じ、明治三十五年六月下旬、北里博士が伝染病研究所長の名を以て内務大臣に提出したる擬似虎列刺患者竹内兼吉に関する細菌学的報告に対して峻烈なる攻撃を加え、北里氏の逆襲する所になりて、ここに再び大衝突を惹起し、論戦相結んで解けざること、凡そ二ヶ月間、更に延びて両博士の門下生石原喜久太郎、柴山五郎作二氏の激烈なる論争となり、明治三十八年にまで及べり、之を所謂竹内菌事件となす、普通新聞紙を始め、医学雑誌の紙上を賑やかせしこと蓋し此衝突事件を第一となし、又た学界に討論の花を咲かせたる点に於ても、之に及ぶもの無し、吾人の觀る

所を以てすれば、兩派の学問的衝突は、竹内菌事件に於て其の絶頂に達し、近年に於ける「チアノクブロール」戦の如き之に比すれば遙かに遜色あり。

時惟れ明治三十五年六月二十五日、東京市芝区内に住める竹内兼吉なる者突然急劇なる下痢症を発し、翌二十六日午後四時擬似虎列刺患者として駒込病院に收容せられしが、やがて一時間余を経て死亡せり、之より先き、伝染病研究所に於ては芝警察署囑託医某より送附せる患者の糞便に就て細菌学的検査を行い、翌二十七日には動物試験をも終え、同日午後一時を以て、真正虎列刺なることを確定し、直ちに北里所長より内務省に報告せり、然るに東京医科大学衛生学教室に於ては、患者の駒込病院に收容せられたる当時、其の糞便より製したる顕微鏡的標本及び穿刺培養を検査せしに、多数の「コンマ」菌及びその聚落を認めたるも、其形態及び培養基発育上に於てコッホ氏虎列刺菌と一致せざりしのみならず、教室所蔵の虎列刺菌と比較的検査を行いし結果、竹内某より培養したる「コンマ」菌は其形状大小聚落及び発育状態に於て大に虎列刺菌と差異あることを発見せしを以て、緒方博士は、七月七日に開会せる中央衛生会の席上に於て、北里博士が、真正虎列刺患者として内務省に報告せし竹内某より培養したる「コンマ」菌の決して虎列刺菌に非ることを論じ、次で同月十九日都下の諸新聞に書を寄せ『虎列刺病毒検査の注意』と題して、竹内某より検出したる者は、コッホ氏虎列刺菌に非ず、フヒンクレル、ブリオール氏菌に酷似せりと公表し、北里博士に対して挑戦せり、其説に依れば、竹内菌は、中央部肥厚して両端に至るに従い狭く、両端尖鋭にして鈍円ならず、又た培養基上発育する聚落の状態及び「ゲラチン」穿刺培養に於ける漏斗の形状に於ても虎列刺菌に異なれりと云うにあり、緒方博士の上記の説一たび諸新聞紙上に現わるるや、讀賣新聞は他に率先して『市内虎列刺患者の検査に関する疑惑』及び『虎列刺検査事件に就て』と題せる二篇の社論を掲げ、大に伝染病研究所を攻撃せり、茲に於てか、北里博士は、緒方に対して一言なかるべからずと、書を七月二十五日刊行の時事新報に寄せ『東京市内に発生せる虎列刺患者に就て』といえる題目の下に緒方博士の所説を駁し、緒方氏が単に細

菌の形態及び培養基發育上より竹内菌を虎列刺菌に非ずと断定せしを咎め、凝集反応、バイフェル氏反応の如き近世細菌学上の検査を行わざりしことを非難して、『不具的検査』なりと笑い、『粗雑不完全なる検査』と嘲り、『學術的断定に非ず』と斥け皮肉極まれる冷罵を試みて、緒方博士を擲揄せり、今其の一二節を左に抄出せん。

△緒方氏は、虎列刺菌検査上、絶対的必要にして決して省略すべからざる凝集反応及びバイフェル氏反応を検せずして『虎列刺菌と全く異なる』と断言せり、大学教授たる緒方氏は、今日以上の二反応が虎列刺菌診断上、如何に必要なかを知らん、知つて之を遂行せざりしか、粗雑不完全なる検査と謂わざるべからず、虎列刺免疫血清の無きが故に行わざりしか、何故に、伝染病研究所に求め来らざりしや、伝染病研究所は、十数頭の虎列刺免疫馬匹を有せり、何時と雖も緒方氏の請求を辞せざるべし。

△緒方氏の報告は、學術的報告に非ず、又た今日細菌学に於て必ず行わざるべからざる検査の順序と方法とを悉くさざるを以て、多少医学の素養を有するものは、敢て緒方氏の論に耳を籍さざるべし、従つて余が学者として之に答弁するの甚だ兎戯に類するを思いぬ、されど医学の素養なきものは、医科大学教授医学博士なる名に眩惑し、疑惑を起すべきをわれり……

△緒方氏は、以上二反応は、虎列刺菌診断上、省略し得べきものなりと信ぜしか、是れ二十年前の頭腦のみ、我々に於ては細菌学の泰斗とも称すべき斯道の専門家（但し讀賣新聞記者の筆）としては甚だ不似合ならずや……予ねて眼中に緒方氏なく、最初から馬鹿にして掛れる北里氏のこととて、思い切り皮肉にして且つ深刻なる冷罵を緒方氏の頭上に浴びせ掌上に翻弄擲揄して、自ら快となせり、ここに於て乎流石温厚なる緒方氏も売り言葉に買い言葉、再び諸新聞紙上に『東京に於ける初発虎列刺患者として報告せる竹内兼吉の大便より培養したる「コンマ」菌』と題せる法性寺入道式の論稿を掲げて北里氏に猛烈なる攻撃を加え、北里氏の行いたる細菌学的検査の毫も信ずべからざる所以を指摘論難して『北里氏は學術上、不可能的報告を公にし、自ら号して、今日の細菌学上絶

対的必要なる検査の方法を悉くして後検診したるものなりといえり、壯言華麗なりと雖、其根本既に亡失し、全篇自ら空虚に歸す、人之を根柢なき一片の放語となすも、又た何等の学術的言辞を以て之に答えんとするか』と論じ、北里氏の報告を目して、『学術上極めて不精確にして信を措くに足らざるものと認め、全然否定して憚らざるなり』と結び、亦以て如何に緒方氏の憤慨せしかを察知すべし、同氏が斯くも激越の詞を以て、北里氏の報告を否定したる所以のものは、偶々緒方氏に対する上記反駁文の中に竹内菌の検査に要せし時間に一大缺陷を發見せしを以てなり、即ち北里氏の文中二十六日午前十一時芝警察署より受取りたる患者の糞便を培養し、翌日動物試験をも終了し、同日午後一時を以て真正虎列刺たることを確定し直ちに報告したりとありて、其の動物試験の條下に『白金耳の寒天培養を「モルモット」の腹腔に注入せしに、十三時間後に斃れたり、然るに十分の一の白金耳を注入せしものは、症状を呈するも、二十四時間の後尚お生存す』との記事あり、緒方氏は此の記事を捉え大に論難して曰く『十分の一金耳を注入したる「モルモット」は、注入後二十四時間生存するを認めて後公報すとあり、換言すれば、研究所より公報に及びし六月二十七日午後一時迄は生存するとせり、然らば則其注入は正に六月二十六日午後一時なりしを知るべし、之を糞便收受の同日午前十一時より算するに、注入材料たる純培養を得るがために、二時間を費やせしのみ、其之に要する準備及び技術の時間を零時間と仮定するも、培養物の孵窠内に留ること僅に二時間のみ、言うを休めよ、天下豈此の如き怪事あらんや、如何なる方法を以てするも、僅々二時間の後に於て、數白金耳を採取し得べき聚落を發生せしむるを得んや』と、是れ実に緒方氏が北里氏の報告を根本的に否定して、学問上信を措くに足らずとなせし根柢なりき、而して之と同時に緒方氏は、竹内菌に対する凝集反応及びバイフェル氏反応の全く陰性なりし自家の試験成績を精叙し、竹内某は決して虎列刺患者に非ずと断定せり。

是に對して北里氏は、『再び東京市内に發生せる虎列刺患者に就て』といえる駁文を新聞紙上に發表し、弁じて曰く、『緒方氏の唯一の攻撃点としたる時間問題は、余が時事新報に寄稿せし記事に依れるものにして、余が内務

大臣に報告せる全文に非ず、余が内務省に報告したるは、六月二十七日午後一時なりと雖、時事新報に原稿を送りしは、実に六月二十八日午前十一時にして、十分の一白金耳の菌量を注射したる動物が、二十四時間の後尚お生存したる時なり、是れ時事新報上に、二十四時間後尚お生存すと記載せるものなり』と受け流し『緒方氏が極力攻撃の辞となして余の正理ある議論と順序ある検査とを抹殺せんとしたる程、緊要なる事項に非ず』と鼻の先きにあしらい、又た一面に於て、竹内菌の形態、培養上の所見の虎列刺菌に一致せること、凝集反応、バイフェル及び反応の立派に陽性なりしことを更に詳述して後又たもや緒方氏を翻弄して『緒方氏は曩きに竹内菌を以て、形態及び培養上より非虎列刺菌と断定せり、されば、次回に公にしたる記事、バイフェル反応及び凝集反応の陰性であることと固より然らん』と例の皮肉をならべて、緒方氏が竹内菌に行いたる反応試験の陰性なりと云える説が虚構捏造なるべき旨を暗示せり。

然れども、緒方氏も決して沈黙せず、更に又『三たび竹内「コンマ」菌に就て』と題し『北里氏が如何に論弁するとも到底信ずべきに非ず、氏は学術上不可能なる報告を作為したりと看做すべきを以て、仮令い如何なる言辭を弄して縷陳すとも、学術上の過誤は到底氏が糊塗し瀾縫し得るの途なしと信ず』と言明し、堅く執つて動かさず、北里氏の論弁聞く耳なしと云わん許りに勿ねつけたり、此の如く緒方北里両氏の間激烈なる論争の交換せらるること約二ヶ月間、而かも其の文が毎回医学雑誌に先ちて、普通新聞紙上に出でしが為め、大に江湖の注目する所となり、且つ両者共に其の所説が屢々純然たる学問の範圍を離れ、個人攻撃に類するが如き事項ありしを以て専門以外の素人までが飛耳張目して両博士の論争に注意するに至り、非常に社会の視聽を聳動したりき。

是を要するに、緒方氏は最初竹内菌を以て形態及び培養基發育上よりコツホ氏虎列刺菌に一致せずとなし、竹内某の真正虎列刺患者に非ることを力説して、北里氏の報告を否定し去り、大学衛生教室の権威を世間に發揮すべく、普通新聞紙の力を藉りて活躍せしに、之に対して北里氏も同じく新聞紙を持つて、緒方氏の所論を駁撃し、虎列刺



菌は其形態及び發育を變化すること多く、之を細菌学的に診斷するには必ずや、凝集反応、バイフェル反応に依らざるべからざる所以を論じ、単に形態及び發育上より竹内菌を非虎列刺菌なりと断言せし緒方氏の説を以て、二十年前の旧式と冷笑せしかば、ここに於て緒方氏も更に竹内菌に対して右の反応試験を行い、其の全く陰性なりしことを突きとめて、再び北里氏に酬いしも、慧敏なる北里氏は、之を相手にせず、其陰性といえるは、予じめ凶る所ありしが為めに毫も信ずるに足らずと言わぬ許りに諷示し、又緒方氏の唯一の攻撃材料とせる時間問題をも軽く受け流して、其の思い違ひなることを仄めかせしが、緒方氏は毫も之を承引せず、最早や北里氏と論争するの要なしとて再び口を開かず、復た筆を執らず、此くして緒方北里両氏間の衝突のみは、一たび其の幕を閉じしも、やがて再び門下生同士の大論争となり、復たもや竜鬪虎搏の活劇を演出しぬ。

吾人は、今ここに緒方北里両氏の竹内菌に関する衝突に対して聊か其の觀る所を披瀝せんか、緒方氏が、最初単に形態及び發育上より竹内菌を非虎列刺菌と断言し、該患者を真正虎列刺に非らずと公表せしは、大学教授の言としては甚だ輕率失体なりしこと固より絮説するの要なし、此点に於て北里氏が新たに虎列刺患者の便中より採取せる虎列刺菌の多くが太く短く彎曲することを論じ、又た、虎列刺菌の形態及び發育状態の必ずしも一定するものに非ずして、屢々不同あることを説き、且つ緒方氏が、細菌学的診斷上甚だ須要にして缺くべからざる凝集反応及びバイフェル反応を行わずして僅かに形態的及び發育的差異より、竹内菌の虎列刺菌に非ることを言明せしを咎責し、『二十年前の頭腦』と冷笑せしは、実に妥当の説にして、緒方氏の急所を突きたるものと謂うべし。

然ども北里氏が其の後緒方氏の反応試験陰性なりと云えるを鼻先であしらい、其の虚構ならんと暗示するが如き口吻を弄せしは、北里氏の為めに甚だ取らざる所なりき、蓋し大学衛生学教室所蔵のコツホ氏「コンマ」菌によりて免疫せられたる家兎の血清が、竹内菌に対して、凝集反応及びバイフェル反応を呈せざりしことは、其後、二木謙三、加屋隆吉氏等の確証せし所にして毫も疑を容るるの余地なく、此点に於て大学の行いし免疫血清の反応検査は

最も確實なりき、然るに北里氏の研究所に於て当時竹内菌の凝集及び溶菌反応に使用せしは、馬免疫血清にて、之によりて其の反応の陽性なることを認め、疑いも無き真正虎列刺菌と看做したりしも、元來健康なる馬血清が虎列刺菌に対して右の反応を呈することは、当時既に明白なる事実なりしが故に、此点に於ては、北里氏の血清反応試験が始めより陽性なりしことは当然と云うべく、又た家兔免疫血清を用いたる大学の反応試験の陰性なりし所以も決して恠しむに足らず、要するに、大学及び研究所の使用せし血清の同種に非ざりしことが、其の試験成績に差異を来せしに過ぎざりしなり、這般の見地より論ずれば、大学派北里派共に一勝一敗あり、然りと雖、公平なる眼より観る時は、緒方氏が最初単に形態及び發育上より見て直ちに竹内菌を非虎列刺菌視し患者を眞の虎列刺に非ざりと断言せしは非常なる失敗と謂わざるべからず、之に対して北里氏が深刻なる冷罵を加え、サンザン緒方氏を翻弄せしも亦た故なきに非ず、斯くして、緒方北里両氏の竹内菌に関する論争は、十中の九まで緒方氏の敗北に歸せしが、其の後に至りて、同氏の門下石原氏の蹶起し、更に第三者として京都医科大学の加屋隆吉氏出でてより北里派に於ても細菌学的檢索法の終始一貫せず、明瞭を缺くの点あること分明となり、両派共に創痍を帯びて、引き退ることとなりしと雖、大体に於ては、慥かに北里派の勝利に歸し、自ら進んで名乗りを上げ突進したる緒方博士の攻撃も、充分に功を奏せざりしのみならず、却て敵に乗ぜらるる所となりしこそ、一生の不覚なりし、されど同氏の門下石原氏の奮闘に至つては、実に目ざましく、北里派の驍將の一人柴山氏を相手として、飽迄攻撃を持續し、北里派に對して幾分なりとも手傷を負わせし功は、亦た録するに足るものあり、いざや左に其の梗概を記せん。

竹内菌の本性に関する緒方北里両博士の論争は漸く明治三十五年八月上旬に至りて普通新聞紙上に其影を絶ちたるも、緒方博士の門下石原喜久太郎氏は、同月下旬刊行の『医事新聞』第六百二十号に『竹内「コンマ」菌に就て』といえる一篇の論文を發表して其の細菌学的研究成績を詳述し、形態及び培養發育上の性質は勿論、凝集溶菌の両反応共にコッホ氏虎列刺菌に一致せざることを断言し、医学雜誌上に於て北里派に對する戦闘を開始せり、これよ

り以来同氏は奮闘大に努め、諸種の医学雑誌に屢々論文を寄せ、又た学会に演説討論を試み、北里博士及び其の門下驍將の一人柴山五郎作氏の所説を駁撃して大学衛生教室のために気焰を吐きたること実に前後十数回、漸く明治三十七年十二月に至て始めて其の鋒芒を収めぬ、吾人は今ここに同氏の論文の内容を一一紹介するの違を有せずと雖、特に同氏が北里派の缺陷弱点を指摘非難せる者の中其主要なる個処を挙げ、併せて柴山氏の所説をも一瞥せんとす。

抑々竹内菌問題の始めて勃発せし時、北里博士は普通新聞紙上に於て、緒方博士の単に形態及び培養基發育上の性質より竹内菌を虎列刺菌に非ずと断定せしを咎め、凝集及び溶菌の両血清反応を以て、虎列刺菌診断上、『唯一絶対的必要』の件と論ぜしことは、既に記載せし所なり、之に対して石原氏は、伝染病研究所が上記の反応試験に用いし血清の虎列刺免疫馬血清なりしことを非難し北里氏の診断の全然価値なきことを痛論せり、其の説に依るに、『北里氏の竹内菌の血清反応を検するや、徹頭徹尾悉く免疫馬血清を以てし、其の溶菌反応に用いし血清量は〇・〇一乃至〇・〇〇一なりき、然れども元來馬の健康血清が虎列刺菌を溶解するの性あることは既に明白な事実にして、コルレ氏の説に徴すれば、健康馬血清は、〇・〇一乃至〇・〇〇五にて溶菌現象を惹起す、然らば則ち竹内菌が研究所の免疫馬血清によりて溶解したるは当然のみ、何ぞ診断上の価値あらんや、又た凝集反応に於ても健康馬血清は虎列刺菌に対して強度の凝集力を呈す、余等は健康馬血清の虎列刺菌及び竹内菌二者共に凝集することを証明し、之を以てする試験の不可なることを認めたり、然るに北里氏は、凝集反応を試験するにも同じく馬免疫血清を以てしたり、是れ亦た其の当を得ず、余等は、竹内菌の血清反応を検するや、凡て免疫家兎の血清を以てし、其の反応の全然陰性なることを確証せり、此等の事実より之を觀るも、北里氏の血清反応によりて竹内菌を虎列刺菌と診断せることの不当なるや明かなりと。

石原氏の上記の駁論は、北里氏が以て虎列刺菌診断上『殆ど唯一絶対的必要』と論じたる血清反応試験に一大缺

陥ありしことを明かにし、北里氏急処を衝けり、然<sup>しか</sup>而其後北里派の柴山氏の行いたる該試験に於ても、馬免疫血清を以てする時は、竹内菌を始め他種の虎列刺菌に陽性反応を認むるにも拘<sup>か</sup>わらず、家兔免疫血清を以てする時は、凝集反応に差異あることを証せり、是に由て之を觀るも、当初研究所に於て竹内菌に行いたる血清反応検査の確実ならざりしことを窮知するに足らん。当時二木謙三氏が大学衛生教室と研究所とに於ける竹内菌血清反応検査の全く一致せざる原因をば、其の使用せし免疫血清の差異に歸し、一は家兔、一は馬血清を以てせるが為めなりと言明せしは、実に正鵠を得たる説なりき、されば、血清反応試験の点に於ては、大学派の方慥<sup>たし</sup>かに確實にして、北里派は疎慢の譏を免る能<sup>あた</sup>わず。

柴山氏が竹内菌を始め、各地の患者より採取せし「コンマ」菌の血清反応を試験するや、或は免疫馬血清を以てし或は免疫家兔血清を用い、其の反応共に陽性なりしとて、『明治三十五年流行せる虎列刺病は、コッホ氏虎列刺菌なり』との断定を下せり、之に対しても、石原氏は痛烈なる反駁を試み、論じて曰く『柴山氏は免疫馬血清と家兔血清とを併用せり、然<sup>しか</sup>るに其の判断は何れに依るものなるや、極めて曖昧なるのみならず、殊<sup>しゅ</sup>に這般<sup>しゅはん</sup>の如きは、其血清の分量をも記載せざるなり、是れ又た氏の論文の学術的<sup>がくじゆつてき</sup>一大缺陷にして立論の証明大に乏しき点なり』と、是れ実に柴山氏の検査法の甚だ不確實不明瞭なることを喝破せるものにして、慥<sup>たし</sup>かに其の急処<sup>きよこ</sup>に中れり、加屋隆吉博士が『東京教室の主張は終始一貫し、研究所の主張は多少明瞭を缺くが如し』と評せし所以<sup>ゆゑん</sup>のもの、蓋<sup>けだ</sup>し理なきに非<sup>あら</sup>ず。

然<sup>しか</sup>りと雖<sup>いへども</sup>石原氏の所説の中にも前後矛盾せるの甚しきものあり、同氏が明治三十五年八月下旬始めて『医事新聞』に發表せし論文には『竹内某の糞便より得たる一種の「コンマ」菌は虎列刺菌<sup>これつせき</sup>に非<sup>あら</sup>ずことを断定し得べし』と言明しながら、明治三十七年十二月下旬に至て稿下せし論文中には意外にも『緒方博士の主張は、コッホ菌に非<sup>あら</sup>ずと云うにあり、虎列刺菌<sup>これつせき</sup>に非<sup>あら</sup>ずと云うには非<sup>あら</sup>ざるなり』と云い又た『家兔血清診断法によれば、余は、虎列刺菌<sup>これつせき</sup>に二種或

は以上あるべきを信ず、則ち虎列刺の原因は、独りコッホ菌のみに非る事を信ず』といい、虎列刺他種論を唱えたり、矛盾撞着も亦甚しからずや、柴山氏が之に対して「嚮きに石原君の師緒方博士は、虎列刺一種論を根拠とし、竹内菌はコッホ氏虎列刺菌に非ず、従つて竹内某なるものは、虎列刺菌に非ずと論ぜられたるが如し、然るに石原君は、今や多種論を唱えんとす、所謂出藍の誉とは美に石原君の如き人に冠すべきものなり、石原君どう自愛せよ』と翻弄擲揄せしも実に当然の次第なりき。

大学派が最初形態及び培養上の所見より、竹内菌を虎列刺菌に非ずと言明し、北里派に対して挑戦を開始したるにも拘わらず、其後に至つて、前言を翻えすが如き辞を漏らし『コッホ菌に非ずと云うにありて、虎列刺菌に非ずとは云わず』と云うが如き曖昧至極なる論をなすの已むを得ざるに至りしは、畢竟緒方博士が当初細菌の形態及び培養上の所見にのみ拘泥して、虎列刺菌の種々の「ワリエテート」あることを閑却せし過に坐するのみ、明治三十五年各地に流行したる虎列刺病が、コッホの記載せし「コンマ」菌と其形態發育を多少異にせる一種の「コンマ」菌に基づきしことは、固より疑いも無く、従つて竹内菌も亦た之に属すること明白なる以上は、大学派の非虎列刺菌説の全然誤謬なるや論を俟たず、仮令い竹内菌の血清反応が在来のコッホ氏虎列刺菌に於けるものに比して差異ありとも、其の「スタム」Stammを別にし或は変種なる場合に於ては、此の如き現象のあらわること、敢て異とするに足らず、要するに大学派の最初は竹内菌を以て虎列刺菌に非ずと明言せしに拘わらず、遂に其の説を翻えし、虎列刺菌多種論を唱うるの已むを得ざるに至りしもの、蓋し当然の径路といふべく、亦た以て其の如何に窮せしかを推知するに足るべし、然りと雖其間に於て北里派の検査法に往々不確實不明瞭の点あることを指摘し、北里及び柴山二氏の所説の弱点缺点をも暴露して、虎列刺菌の細菌学的診断上、多少資する所ありし功績に至つては之を是認せざるべからず。

今日より所謂竹内菌事件なるものを回顧すれば畢竟瑣末枝葉の小問題に過ぎず、而かも其の大に江湖の視聽を聳

動し、今尚お吾人の記憶に新たなる所以ゆえんのもの、我国細菌学の泰斗なる緒方北里両博士が普通新聞紙上に於て激論を闘わし、二ヶ月間も論争を継続せしが為めのみ、而して緒方氏の遂に失敗すべきことは、当時夙つとに具眼者の認知せし所、其後石原氏の蹶起して奮闘大に努めたるも北里派の牙城を陥落すること能あたわざりしのみならず、却て主將緒方氏の説に裏切りするに等しき虎列刺菌多種説を唱うるが如き「チレンマ」に陥りぬ、想うに、此の如き失敗を招きし所以ゆえんのものは、最初緒方氏が、「ペスト」菌問題に於て、北里氏を屈服せしめたる戦勝の余威に乗じ、勝つも胃の緒をしめず、虎列刺菌問題に於ても亦もや北里氏を追窮せんとして、妄進したる輕挙の致せし所のみ、固より其後の論戦に於て互いに一勝一敗ありしとは云え、終局の勝利は北里派に歸し、嚮さきの「ペスト」菌問題の衝突に幸い大勝を奏したる大学派の虎列刺戦には敗北となりしこそ、一生の不覚といふべけれ。

## (六) 第六回の衝突——伝研転管及び血清問題

祇園精舎の鐘の聲、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理は遂に免るるに由なし、鎌倉山の星月夜空しく影消えて、五山の楼台煙霧雨冷やかに、暮雲に響く鐘声行人の腸を絶ち、江府の榮華墨田川の水と流れては、待乳山に啼くや杜鵑ほととぎすの声悲しく、征馬頻りに嘶いなないて帰るを想う、さしも白金三光台上に虎踞して全都の杏林界を俯瞰し、勢威世に類い無かりし北里博士の全盛も、盈みつれば虧かくる時は来ぬ。

回顧すれば明治二十六年私立伝染病研究所の創設せられ次で内務省管轄の下に官立となつてより茲ここに二十有余年、北里博士の世に在らん限りは、研究所の柱石長としえに動かず、難攻不落の金城も物かわと許ばかり想われしに、大正三年の初秋に至り、突然転管の令下りて研究所は文部省の管轄に移され、帝国大学に併合せらるることとなりぬ、北里博士たるもの何ぞ之を肯うべき、ことに相見ること仇敵の如く、犬猿も啻ただならざる青山医科大学長の支配下に立つが如きに至りては、死しても堪ゆる所に非あらず是を以て博士は其の部下と共に潔よく連袂辞職し、多年占居せし白金

三光台を涙ながらに見棄てて野に下りぬ、遺恨いか許りぞや、されば博士の境遇に同情を寄する者頗る多く、官憲の横暴と官学の専恣とを絶叫するの声盛んに起りて、転管の不当を鳴らす声と相和し、四方医人の鼓膜を驚破せり、吾人は伝研転管の裏面の消息を知らざるに非ずと雖、茲には之を記述するを避け、唯だ表面上に於ける転管の是非に関して聊か其の観る所を披瀝したるの後、之に引續きて起りたる血清問題の衝突に及ばんと欲す。

抑々伝研転管の令下るや、事咄嗟に出て、北里博士さえ予じめ之を知る所なく、全く寝耳にに水の感ありし程なれば、誰しも意外の思いを抱かざるは無く、従つて種々揣摩付度の説の出でしも、亦た恠しむに足らず、其中にも最も江湖の注意を惹きしものは、青山学長が当時の内閣の首相大隈侯と懇意なるを好機とし、多年仇視せる北里氏に一大打撃を与うべく候を慫慂して転管を断行せしめたりと云える風評なりき、されば之を信ずる者にありては伝研の転管を以て大学派と北里派との間に於ける多年の衝突の結果なりと看做し、青山学長が自己の怨恨を晴らすと共に大学の勢力範囲を拡張せんが為めの野心より伝研を奪い北里氏を放逐するに至りたるものなりと思惟して、一斉に青山学長を攻撃するに勉め、其の甚だしきものに至ては、更に青山氏の私行を発きて、中傷譏誣らざる所なく、果ては大隈内閣の攻撃に及び、論争の火の手益々燃え上がりて啻に医界に於けるのみならず、江湖一般の大問題となりぬ。然ども吾人を以て之を觀れば是れ畢竟疑心暗鬼を出だしたるの類にして、必ずしも的確なる証憑あるに非ず、単に青山氏が大隈侯と親しく、北里氏と相容れざるの故を以て、伝研転管の動機を揣摩し、上記の如き付度を試みて瓢箪より駒を出せしに過ぎざるなり、よしや一步を讓て青山学長の復習及び野心に出でたる者とすも、之によつて直ちに伝研転管の挙を非難すべきに非ず、何となれば、是れ亦自然の成り行きなればなり、大隈首相は当時その理由を経費節減に籍りしも、其実は他に至当適切な理由ありしなり、是れ必ずしも吾人一個の想像に非ず、仮令い裏面の消息に通ぜずとも、伝研其者の使命を顧み、又た北里氏私人の勢力が内務省衛生局に瀰漫して、衛生局の行うべき行政事務の一部が伝研内に吸収せられ、由て以て行政機関の混雜紊乱を醸成せしめたる事実に想倒し

来らば、伝研転管の動機に正当の理由根拠あることを看取するに難からざるべし、是れ吾人の左に一言なき能わざる所以なり、

当時転管に反対せし論者の中には、伝研設立の目的を挙げ、内務省衛生局の管轄下に置くの正当なる所以を論ぜしもの少からず、杏林論壇に其人ありと知られし故川上巖華氏の如きも、這般の説を唱導するに努めたりき、蓋し其意に以て、伝研は単に伝染病の学術的研究を為す純学府に非ずして、其の研究の結果を衛生行政に應用する行政機関の一なり、されば之を文部省に移すは其の当を得ず、苟くも伝研が衛生行政機関たる以上は、内務省の管轄下に置かざるべからざることは理の看易き所なりと、而して此説に同意を表する者亦た少なからざりしが、吾人を以て之を觀れば、畢竟囚われたる僻説に過ぎず、夫れ伝染病の研究は伝研主要の目的にして之を離れて其の存在の価値を有せず、學術の研究は之を本来の性質より見ても文部省の当に管すべき所にして、衛生行政を掌る内務省の關すべきものに非ず、又た伝研の執るべき一部の行政的事務の如きも、之を内務省衛生局内に移して何等の支障あらず、血清、痘苗等の販売亦た然り、而して衛生行政に關する医学的知識に至ては内務省衛生局内に専門の技師の在るあり、これ以外に特殊の衛生行政機関あるを要せず、されば、學術研究を以て主要の目的とする伝研を文部省の管轄に移したればとて、敢て非難すべきに非ず、而して文部省内に之を置くとともに、衛生局と連絡を取る以上は、其の研究の結果を衛生行政に適用するに何の不都合やある、但し伝研の行務全部を悉く文部省の所轄に移したるは、非難の余地なきに非ず、例之ば、血清及び痘苗の販売等の如し、是等は寧ろ衛生局の一部又たは衛生試験所に於て取扱うべきものなり、然ども之を要するに、伝研の管轄には相当の理由適切な根拠ありて毫も攻撃すべき缺陷あるを認めず、されども、之が一時江湖の大問題となりしは、北里博士の盛名に心酔し或は博士を利用して何か為にせんと企つる輩の新聞及び集会に囂々其の非を鳴らして蟬鳴蛙躁したるが為めのみ。

元來伝染病研究所の設立せられしは、既に論ぜしが如く、北里博士を大学に容ること能わざりしが為めに、



歸朝當時博士の名声隆々たるに眩暈せる朝野の有志家が相議して私立の伝染病研究機関を設けたるに始まり、次で後藤新平氏等の斡旋功を奏して之を官立となし、内務省に隷属せしむるに至りたるなり、されば伝研は畢竟北里氏一人の爲めに創設せられたるものと謂うも不可なく若し同氏歸朝の当時、文部省内に有力の人ありしならんには、省中に研究機関を新設し、大学と相併行して研究に従事せしめんならん、然るに当時此の如き活眼達識の人なかりしかば、遂に伝研を内務省の所管となすが如き変則の結果に終りしなり、而して伝研が學術研究以外に衛生行政事務にも関与し、又た血清「ツベルクリン」等を販売して、恰も一箇の独立せる官庁の如き状態となり、北里氏其の實権を掌握して堅固なる基礎を成就するに至るや、本来内務省の隷属たる伝研は、其の實北里氏の伝研となり官紀上看過すること能わざる幾多の陰影を生じたるの結果遂に大隈内閣に至りて転管の断行となり、十余年の長きに亘りて伝研の内部に鬱積せる弊習を一掃しぬ（這般裏面の真相に就ては茲に述ぶるを欲せず）尚お此他に、北里氏が学者としての權威及び真価の失墜せしことも亦た転管の動機に与て力あることを銘記せざるべからず、大正三年十一月一日発行の『日本及日本人』第六四二号に於て、断霞楼主人は其の消息を述べて曰く

十余年前白金三光台上、世界一を以て称せられし巨然たる研究所の新築せられて以来、北里の手によりて果して何の成績かを見たる、彼は唯だ養生園の患者に注射するに忙殺せられたるの嫌なしとせず（中略）伝研は北里なる木像を安置せんが爲めに建立せられしもの、今や其本尊の金箔剥落して光明の又た仰ぐに足らざるに至りて、他に合祀せらるるは、少しも怪しむに足らざるなり、這回の転管は何の糸瓜も無し、唯だ人強くして無理を通し来りし者が力量漸く衰えて正理に帰せしめられたるのみ、否久しく學術功勞者の美衣に掩われて、其真骨頂の知られざりし北里が、近来漸く地金を露出し来りて遂に其光輝を失いたる結果にして、北里の眞人格の暴露が今日の転管を招かしめたるのみ云々。

言稍々矯激に失すと雖、慥に一面の事實を道破して遺憾なきに庶幾し、噫伝研の転管は北里博士其人に取りては、

晴天の霹靂たりしならんも、吾人より之を觀るに、必ずしも驚くに足らざるなり。

盛者必衰の理は、学者間にも免れず、伝研の転管は今まで全盛を極めし北里氏を驅て突然失意不遇の境遇に転落せしめぬ、当時博士の胸裡果して如何なりしか、博士が部下郎党と共に千秋の恨みを吞みつつ涙を揮つて白金三光台を去り、犬猿ただ啗ならざる大学派に研究所の城廓を明け渡せし悲痛の状を想う毎に、転うたた人事の転変の急激なるに驚き、一栄一落是春秋の感に堪ゆる能あたわざるなり、然しかれども博士が這般しやはんの運命に遭遇したる所以ゆえんのもの、亦た天の命なり、自然の数なり、断霞楼主人の論は実に其の消息を明々地に暴露せるもの、何ぞ又た青山学長を恨むべき、今日尚お伝研移管を啣くむの徒あらば、請う先ず北里氏時代に於ける伝研内部の情態を回想せよ。

伝研転管の挙は、吾人を以て之を觀るに、慥たしかに一英断と称すべきものなりき、唯其の咄嗟に出でたると、大学派と北里派との冰炭相容れざるものあるとの為め種々の物議を醸し、又た他の一面に於ては北里氏の名声に眩目心酔せる一派の徒が、転管の真相をも顧みずして遮こ二無二狂奔妄動したるが為め一時世間を騒がせしに過ぎず、『時』は最後の審判者なり、転管後星霜を閱ひみすること茲こに三、今に至りて虚心平氣當時を回想せば、誰かまた転管の已やむを得ざりしことを肯定せざるを得んや、唯吾人の稍々憾うらみとする所は、転管後の伝研に職を奉ずる士が、北研の人々に比して声望に乏しきこと是れなり、然しかれども是れ亦た已やむを得ざる所、吾人は遙かに其の向上發展を祈るの他無きのみ。

要するに伝研の転管は伝研の内部に弱点陰影ありしと、北里氏の金箔漸よつやく剥落して其の真相を暴露せしとの為め遂に大学派の乗ずる所となり其の虚を衝かれし結果のみ、必ずしも官学の横暴にのみ歸すべからざるなり。

吾人とても伝染病研究所の歴史を尊重せざるに非あらず、又た北里博士の伝染病学の發達につくしたる功績を認めざるに非あらず、然しかれども伝研の転管に対して、政府当局者の措置を是認する所以ゆえんのものは、既に論じたるが如く、伝研の内部に多年鬱積したる弊習と陰影とを一掃する上に於て万已やむを得ざりしことを知悉するを以てなり、北里氏は元來

学の人に非ずして略の人なり、其の世界的学者なる名と血清療法発見者という名によりて帰朝当時以来朝野の憧憬を受け、白金三光台上の大研究所に虎踞するや、威名他に比すべきものなきを奇貨とし、衛生行政の主管たる内務省の下に立ちながら、却て衛生局を頗使し之に対すること恰も自己の属隸の如く、内務省の衛生局は北里個人の衛生局なるが如き觀を呈するに至りぬ、而かも北里氏の機略縦横なる、自己に都合善き場合には内務省を利用し、都合悪るき時は名を学問の独立に籍り或は研究所の名目の下に隠れて、内務省行政官吏の容喙を許るさず、之に加うるに養生園なる私立病院を設け、「ツベルクリン」の効果を過度に誇張して多数の結核患者を引き寄せ、黄金の雨を降らせて私腹を肥やせしことは夙に世人の熟知する所なり、此の如く北里氏によりて助長せられたる弊を計上すれば、同氏の功罪は未だ容易に断定すべからず、大隈内閣以前、政友会内閣の当時、既に伝研転管の閣議に上りたることありしも、或事情のために躊躇せしに、偶々大隈内閣に至て之を断行したりしのみ、而て其の断行の咄嗟に出で電光石火も啻ならざりしは、蓋し北里一派をして乗ずべき寸毫の余地なからしめんが為めなりき、十有余年の長きに亘りて伝研の城廓に立て籠り多大の勢威を揮つて内務省を頗使操縦し何事を行いても殆ど成らざるは無かりし時運の寵児北里氏も今や見ん事大隈内閣の為に背負い投げを喰わされ、城廓を明け渡すの已むを得ざるに至りしもの、蓋し当然必至の運命と謂わざるべからず。

吾人は伝研転管を断行したる大隈侯の背後に青山学長の潜みいたりしや否やを知らず、然ども侯と青山氏との親善なる關係あるに徴すれば、侯の青山氏の意見を聴き、青山氏が侯に答うる所ありしやも知るべからず、此の如き事実の有無は姑らく論外に措くとするも、既に学者としての北里氏の権威は地に墮ちて其金箔甚しく剥脱し之に加うるに伝研内部には幾多の陰影あり、又た北里氏個人の勢力の内務省に瀰蔓して、官紀に於ても衛生行政の点に於ても看過すべからざる事実ある以上、侯が一身に責任を負うて転管の断行に出でたりしは固より其処のみ、吾人は大隈内閣の秕政に対して大に反対を唱えし一人なりと雖、独り伝研転管の挙に至ては之を當時に於ける一英断とな

すに躊躇せざるものなり。

然ども北里派に至ては、転管の動機を以て、其の仇敵たる大学派の巨頭青山博士の獻策に出でたるものと思惟し、其の鬱憤を晴さんが為め、普通新聞記者を使喚して盛んに青山氏を攻撃せしめ、又大隈内閣に多大の悪感を抱ける政友会は、嘗て其内閣當時に於て伝研の転管を計画したることありしにも拘わらず、素知らぬ顔を装うて、之を大隈内閣攻撃の一材料に供し、官学の横暴を絶叫せる当時の人心に迎合するに努めたり、腹黒き政友会の行動をしては、蓋し恠しむに足らずと雖、当時我が医界の人士までが、北里一派及び政友会策士の尻馬に乗り、伝研転管の真相動機をも究むることなくして、徒らに大隈内閣と官学とを非難攻撃し狂奔妄動したりは、蓋し群集心理の致せし所とは云え、心ある者の三笑九嘆に堪えざる次第なりき、抑も北里氏が民間の医士社会に多大の勢力を有し、伝研転管の当時、幾多の医士をして反対決議をなさしめ、益々転管問題の声を大ならしむるを得たりしは、蓋し三月間講習の門下生の各地殆ど到る所に瀰蔓し、北里氏の郎党を以て自ら任ずる者の幾千名に達せること亦大に与て力あるに由らずんば非ず、北里氏が多年大学派と対抗して下らざりし所以のもの、実に此の如き多数の味方援者を背後に有せしを以てなり、伝研転管の如き当然の問題が端なくも医界に一大物議を惹起し、北里氏に対する同情の声と官学に対する反抗の叫びとが、四方有余の医人の鼓膜を響動せしもの蓋し恠しむに足らざるなり。

若しそれ伝研転管に引き続いて起りたる血清問題の真相に至ても、吾人より之を觀れば亦た確固たる根拠証憑あるに非ずして、主として北里氏の党与の大学に対する反感悪感に基づき、多数の新聞雑誌が、北里派の操縦する所となりて、業々しく報導せし結果、一時江湖の視聽を惹きたるに過ぎざるなり、官研製造の実扶埤里血清の効力微弱にして、治療上殆ど何等の価値なしとは、転管後の当時医界の一部に於ても盛んに論唱せられたる所なりしが、翻つて之を始めて唱え出だせし者の北里氏の忠実なる一郎党なりしことを回想せば、蓋し思い半に過ぐるものあらん、然りと雖世人の信用が尚お依然として北里一門を離れざりしと、又た伝研の後継者たる官学の士の新たに大規

模の研究所に入りて、一時間誤つきしことありしとの為め、官研血清の効力の疑われ、効果の危ぶまれしも亦た自然の數と謂わざるべからず、聞く所に依れば北里一門の伝研を大学に明け渡すの際、血清採取に使用せし馬の免疫度數表を故意に不明ならしめ、或は重要器械の貴重部を隠匿して後継者を困却せしめたりと、果して其の事実たりしや否やは固より吾人の保証するの限りに非ずと雖、此の如き風評の往々世人の話題に上りたることあるに徴すれば、亦た以て北里派の如何に大学派の手腕技柄を侮り、豎子何ぞ能く為さんと蔑視せしかを推知するに足るべく、又た一般医師に於ても、血清製造事業の果して大学派の手によりて従來の如く満足に出来得べきやを懸念せしことの必ずしも偶然に非るを知らん、然ども此の如きは、余りに北里派を買い被むり、あまりに大学派を見縊れる僻見に過ぎざりき、苟くも斯学の素養造詣ある者ならば、血清製造の業に従うに何の難きことか之れあらん、よしや一時は規模の大なるが為稍間諛つきしことありたりとするも、血清製造其者に何等の神秘的技術も伝授も無き以上は、其の従來斯業に携りしこと無きの故を以て、直ちに伝研の後継者を侮り、其の手腕を蔑視したるが如きは吾人の与みする能わざりし所なりき、されば転管当時は兎角の評ありし官研血清も漸く月を経るに従つて各臨床家より大体に於て其効力の確實なることを証明せられ、今までの不安の念は漸を逐うて消失しぬ、此に於てか北里派に於ては再び官研血清の信用を失わしめんが為め、其の機関たる某医事雑誌を始め、二三の普通新聞紙上に『官研血清は、其實官研に於て製造したるものに非ず、米国のマルフォド会社より輸入したる血清を混合し以て漸く其効力を保たしめたるものなり』と記載せしめ、一般医師をして、又々疑惑を抱かしめたり、吾人は這般の事實に就て其詳細を知悉せず、されど医界の事情に精通せる操觚者某氏の説に依るに、青山氏は転管当時其部下の未だ血清製造に習熟せざるの間、万一を慮かり、其準備として、大量の血清を米国より輸入したりしならんと云えり、吾人は固より其真偽を知らずと雖ここには単に一説として之を紹述し置くのみ、然りと雖、米国より輸入したる血清の混和に由つて漸く官研血清の効力を保持し得たりと云うが如き説に至ては、畢竟素人瞞しのみ、決して識者を欺むくに足らざる

なり。

上記の血清効力問題の如き、之を今日より観れば、畢竟囚われたる偏見僻説にして、固より深く論究するの価値あらず、而て之と関聯して起りたる血清検定問題に至ても、其真相を究むれば、何等確固たる根拠も理由もなく、徒らに大学派に対する悪感に駆られて蝉鳴蛙躁せしに過ぎず、其の識者の顧みる所とならざりしもの蓋し当然のみ。

政府が官研内に血清検定機関を新設して民間製造血清の検定を開始するや、北里派及び其の与党は政府と官学とに対して猛烈なる攻撃を加え、之を以て民間に於ける血清事業を圧迫し、又た名を検定料に籍りて重税を課する不当の措置なりとし、例に由つて例の如く新聞政策を利用して非難攻撃到らざるは無く、又た一面には血清療法の見者たる北里氏所管の北研血清に対し、官研未熟の徒が其の効価を検定するが如きは不倫僭越の甚しきものなりと罵倒し、医界の弥次馬連亦た之に応援して、一時新聞雑誌の記事を賑わかせることは、吾人の記憶に尚お新たな所なり、然ども其の遂に空騒に終わりし所以のものは何ぞや曰く其の主張に毫も確固たる根柢なく、識者の肯定する所とならざりしを以てなり、請う吾人をして聊か其の観る所を披瀝せしめよ、

抑も血清検定のことたる、決して転管以後に企画せられたるものに非ず、夙に北里氏の伝研所長時代同氏自ら発案したるものなり、当時既に私立石神伝染病研究所あり、佐多氏の私立血清薬院あり、其他二三の地方に同様の私立血清製造機関ありしを以て、北里氏は血清検定の必要あることを感じ之を實行するの意ありしが、事ありて果たさざりしのみ、されば官研の之を實行せしは、要するに北里氏の意志を継承せしものなり、然るにも拘わらず北里派の囂々之を非難して民業の圧迫云々を叫びたるは、畢竟前日の権力者たる北里氏の地位を換え、受け身となりたりしことが癩癩にさわりしが為めにて、理を非に枉げてまでも血清検定に反対せしに過ぎず、独り是れのみならざるなり、伝染病学血清学に関する知識は、北里派の特別専売なるが如くに信じ、大学派は之一籌を輸するものとして軽蔑しいたるに、今や大学派の血清検定の衝に当ることとなりしかば、不快不平不満の念実に譬えんに物なく、

感情に駆られて強いて反対せざるを得ざるに至りしなり、是れ亦た騎虎の勢い已むを得ざる所なりしならんも、識者は断じて之に与みせず、若しそれ北研以外の私立血清製造所の中、血清検定に反対の声を漏らし、且つ検定の衝に当る大学派の人々の技倆を揣摩して往々罵倒したるものありしが如きは、蓋し検定料の支出を好まざると官研に好感を有せざるとの爲めに、彼の大阪に私立血清薬院を設立し巨万の富を作りつつある佐多愛彦氏の如きも、当時関西日報記者に語つて毒々しく官研の士の無能なることを鳴らし、此の如き輩より血清の検定を受くるは、本末を顛倒せるの甚しきものなりと笑い、官研の血清検定を目して、北里派の言の如く民業を圧迫するの暴挙なりと罵りしことあり。

吾人は固より官学を謳歌するものに非ず然ども血清検定の必要なることは夙に之を認めたりしを以て、当時「メヂチーネル」誌上に於て官学の血清検定機関を新設したるに賛意を表し左の如く論じたることありき。

血清検定に対する非難攻撃の裏面には、颯慥に堪えざる感情問題の蟠れるが如し、然ども冷静なる第三者の立場より血清検定問題を観れば、須らく区々たる感情より離れて、学問的見地及び公衆衛生上の方面より真面目に考究すべきものなり、徒らに北里対青山の個人的關係等を云々して、此の重要な問題に容喙し、其の非理なることを唱導するが如きは、科学者を以て自ら任ずべき医家の行動とは受け取れず、想うに斯学の進歩発展伴うて、今後とも各地方に血清製造機関の陸續設立せらるることは理の見易き所なるを以て、政府が予じめ血清検定規則を發布し、効力の変動し易き血清を一々検定して一般医家に血清使用の道を誤ること無からしむるは、実に機宜に適せる措置というべく、斯学のためにも、又た公衆衛生上のためにも賞賛すべきことなり、北里対青山關係云々の如きは第三者たる吾人には何等の意義もなし。

一派の医家の中には、血清検定の動機を以て、大学派が北里派を圧迫せんとする野心に出でたるが如くに論ずるものあり、然ども吾人より之を觀るに、一笑にだも値せず、北研の血清が依然として従来のごとき効力を

有せるならば、之を検定せらるるとも、何の差支かあらん、否之が為めに益々世の信用を得るに至るべし、仮令たとい彼らの主唱するが如くに、大学派が北里派を圧迫せんがために、血清検定機関を新設したりしものとするも、北研の血清にして實際上の効価確實ならば、如何にして之を圧迫するを得べき、血清検定其者は學術上に關する事柄なり、決して其間に党派的感情及び野心を容るるを許さず。云々

是を要するに、血清検定規則の發布は、之を學術上の見地より論ずるも、又た國家衛生の方面より觀るも、決して非難すべきことに非るのみならず、寧ろ雙手を挙げて歡迎すべきものなりき、然るに之に対して一時非難攻撃の聲盛んに挙りしは、畢竟感情に驅られたる結果のみ、而て其の由て起る所は北里派の大學派に対する怨恨の情と復仇心とにありしこと、誰か之を非定するを得んや、是れ吾人が当時大に其非を論ぜし所以ゆえんにして、學術上及び國家衛生上重要な問題に対し党同伐異の私情を容れ、妄りに其の是非を蝶々するが如きは、科學者たる医家の決して為すべきことに非ず、是に由て之を觀れば、血清検定に対する北里一派の攻撃が遂に其の目的を達すること能あたわずして一種の弥次馬騒ぎに終わりし所以ゆえんのもの蓋し当然の徑路と謂わざるべからず。

(附記) 近年北里派の某氏が官研製造の実布埵里抗毒素血清中に多数の腐敗菌を含有せりと唱え、遠山椿吉氏の検定書を証憑として大に呼号せることありしも、吾人より之を觀れば、學問上の根拠及び証跡頗る薄弱にして之を茲に記述するの甚だ大人氣なきを信ずるが故に本篇には言及せず。

## (七) 第七回の衝突——古賀液問題

一葉落ちて天下の秋を知る、北里博士が多年竜蟠虎踞したる伝研の城廓を大學派に明け渡すの已むを得ざるに至りしは、蓋し博士の将来の運命を暗示せし悲劇の序幕にして、爾来北里派の勢力從來の如くに振しわらず、而かも意氣尚お衰えざる博士は伝研管の当時豪語して曰えらく、内務省の伝研というも其実は余の研究所なりき、余ありて



此の研究所あり、余にして去らば豈亦た伝染病研究所あらんやと、何ぞ其意気の豪宕にして其の自信の強き、然ども大正の北里氏は最早帰朝時代に於けるが如き時代の寵児に非ず、其の金箔は剥落し其真価は暴露せり、仮令い野心の尚お胸に燃え熱脈絡に沸くとも、一たび時運の翻弄する所となり、多年の仇敵たる大学派に伝研を譲り渡さざるを得ざるに至りては、豈焉んぞ白頭を抱えて秋風草堂に泣くの感なしとせんや、噫人生蹉跎多く、栄枯は一睡の夢のみ、転管後北里氏の朗党結束して起ち血清問題を楯にとりて盛んに官研を攻撃し、其の無能と横暴とを鳴らし一は天下の同情を買い、一は北里氏の名声信望を繋ぐに勉めたりしと雖、一時平地に波瀾を捲き起したるに留まり遂に其目的を貫くこと能わざりしぞ是非なけれ、それさえあるに、北研が結核新治療剤として世に提供せし古賀液即ち「チアノクプロール」に関して一大論争の起るあり、血清問題の際、北里派より劇烈なる攻撃を受けて遺恨骨髓に徹せし大学派は、時こそ来たれりとばかり、逆襲を試み論戦殆ど半歳に亘りしが、遂に脆くも北里派の敗北に終りて、一時世に時めきし古賀液も、あわれ悲惨の最期を遂げぬ、噫北研を背景とし、幾多の新聞雑誌を後援として世に出で、一時は結核の靈藥とまで信ぜられたる古賀液の運命さえ、あわれ此の如くに果敢なかりき、誰か其の末路の蕭條たるを見て『天津橋上人の問うなく、独り危欄に依りて落陣を看る』の感なからんや。

今日より古賀液問題を回想すれば、畢竟瑣末の小問題のみ、而かも其の医界に一大旋風を起し一大渦瀾を生じたる所以のものは、夙に新聞雑誌によりて其の効価のあまりに誇張せられたると、惰力的信用を有する北研の有せしことに外ならず、若しそれ古賀液にして新聞雑誌の誇大的吹聴なく、又た北研の背景なかりせば、恐くは江湖の注目を惹かずして、そのままに看過せられしやも測り知るべからず、蓋し古賀液なるものは古賀氏の創見に出でたるものに非ずして畢竟独逸医学者の実験研究を換骨奪胎したるものに過ぎず、而かも其の学界に公にせらるる以前より既に多数の普通新聞は相争うて同液の斬新卓絶の結核剤たることを掲載し、甚しきは一回の注射能く結核病を全治し得べしと称し、同病患者の一大福音として殆ど在らん限りの讃辞を羅列したる大新聞紙さえありき、されば一

般世人は勿論、医家の中にも之を信用するもの頗る多く、又た医学界に於ても古賀氏の公表を待つこと、恰も大旱の雲霓を望むが如くなりき、斯くして古賀液は新聞政策の成功により忽ち其盛名を江湖に馳するを得たりしなり、然りと雖其の真価の未だ明かならざしりを以疑惑の念を抱く者も多かりしが、大正四年四月北里研究所同窓会に於て、古賀氏は始めて其の製剤に関する研究成績を発表し、動物試験に於ては約八十%の治癒を認めたりといひ、臨牀実験に於ては四六・三%の治癒者、四十七%の軽快者を見たりといひ、其の結果の非常に良好なることを明言せり、かねて新聞雑誌の誇大的記事に眩惑せる地方医家は、今や古賀氏の公表せる所を見聞して殆ど驚喜措く所を知らず、相争うて同液を購求し又千里の道をも遠しとせずして講習会に出ずるものあり、此の如くにして古賀液の名愈々世に高まり、結核病無二の新剤として大に持て囃されしこと、実に予想の外に出ずるものありき、當時に於ける古賀氏の得意いか許りなりしぞや。

然りと雖、古賀液なるものが果たして創製者の公表せしが如くに非常なる卓効を奏するものなるや否やは固より多数医学者の疑問とせし所にして、既に其當時に於ても同液の効価を非定せしもの尠からざりき、啻にこれのみならざるなり、古賀氏が其の製剤の化学的集成を秘して世に示さず、唯「チアン」と銅との複塩なることを一言せしのみにて、而かも其の製剤の効験甚だ顕著なる事例を鼓吹唱導したりしことは痛く識者の反感を買えり、苟くも古賀氏にして其実験成績の頗る良好なることを報告したる以上は、之と同時に其の製剤の化学的集成をも公表すべきは、学者たるものの責任にして且つ義務なり、然るに事ここに出でず、飽迄も世に秘せんとするは、咄々怪事の極なりとて憤激するの士亦た頗る多く、遂に東京医学士会および明治医会は相前後して古賀液に対する取締を政府当局者に建議するに至れり、是れ実に大学派が古賀液と北研とに対して公然火蓋を切りたる初なりき、爾来同液の効力に関する世論日を逐うて盛んとなり、是非賛否の説踵出して殆ど底止する所を知らざるが如き状に陥りしかば、遂に東京医学会は大正五年一月特に臨時例会を開催して、古賀液に関する諸家の実験成績を発表せしむることとなりぬ。

是れより先き大学に於ては、芳我石雄氏主となりて古賀液を細菌学的に研究し、緒方知三郎氏は之と共同して更に病理学上より其の効力を解決するに勉めたりしが、其結果古賀液の殆ど治療的效果なきことを確認したりしかば、前記東京医学会臨時会に於て其の所見を発表し、古賀液の効力を非定したり、ことに年壯氣鋭の緒方氏は、古賀液の試験動物に於ける治療所見を痛烈に攻撃し、併せて同液の化学式を明言せよと迫り、大学派のために一大氣焰を吐きしのみならず、更に其後に至りても『古賀氏の「チアノクプロール」を結核治療剤として使用するに至れる學術的根拠は極めて不確実なり』と題せる一篇の駁文を公にし、病理学的所見の上より古賀氏の急処を衝き、其の報告の到底信ずるに足らざることを断言せり。

芳我氏は古賀液の結核菌に対する毒力の極めて弱く、其千倍の希釈度を以てするも尚お能く結核菌を死に到しむること能わざるを論じ、化学的療法と称するに足らざることを唱破せしは、東京医学会の臨時例会に於ける演説中特殊の異彩を放ちたるものなりき、而て古賀氏の同僚たる北研の草間氏いそと雖も、古賀液の結核菌を殺すの力なきを説き、病理組織学所見に徴して、試験動物の病竈内びょうそうに於ける結核菌は、古賀液注射後四五週間までは明かに増殖し、菌体破壊及び融解等の変化を認むること能わず、唯だ喰菌現象の増劇するを見るのみと云えり、而て大学派の緒方氏は、病理学的檢索上、結核病機の進行を底止し治療に向わしめたりと看過すに足るべき所見を証明する能わずと断言し、結核症の治療或は軽快と、組織片に於ける結核節一部の治療現象とは同一視すべきものに非ることを述べ以て一般医家の注意を促せり、既に結核菌を殺すに足らず、結核病機の進行を停止せしむること能わずとすれば古賀液の眞価は容易に推知するを得べく、其の決して化学的療法と称すべき価値なきや明かなり、此の点は特に大學派の明言せし所にして、古賀液が特殊の効力を呈するの理なきことは、大正五年一月の東京医学会臨時例会に於て大學派によりて明々地に暴露せられたりき。

当時大學派の報告に対する古賀氏の討論は、前年北里研究所同窓会に於ける報告の堂々たるに反して、萎靡振わ

ざりき、同氏は其の製剤の効力の弁護に勉めながら、他の一面に於ては、結核の極初期のものにては格別障碍を認めざるも、二期三期の症にては初めは有効に作用するに拘わらず三期は二三回、二期は四五回、同量を用ゆるか若くは増量を行う時は著るしく症状の憎悪するを知れりと云えり、是れ豈同氏自ら其製剤の効力の不確実なることを裏書したるものと看做すべきに非ずや、又緒方氏より同液の化学式を明言せよと迫られたるに對し、未だ研究中なりと稱し、言を研究に託して飽迄も世に秘せしが如き、或る裏面的事情ありしにもせよ、決して学者の態度に非ず、古賀氏が益々識者の反感を招き、特に大学派より追窮を受けし所以のもの豈それ偶然ならんや。

其後四月の日本内科学会に於ける両派の論戦を見るも、古賀氏の旗幟頗る鮮明を缺き、益々識者の信用を失うに至りし所以を知るに難からず、ことに講演者芳我氏の説に反對して其の試験用に供したる動物の甚だ少数なることを力説し、之によつて「チアノクブロール」の効価を決するに足らずとまで論難せしが如き、却て同氏の第一回報告の不完全なることを自ら証明したると同様に所謂毛を吹いて疵を求めたるものなりき、看よ古賀氏が試験用に供したる動物の総数は四十六頭なりしも、其中真に「チアノクブロール」の効力の結果を検索せし動物は二十八頭に過ぎざりしに非ずや、之に比すれば芳賀氏の使用せし試験動物の数は遙かに多し、又古賀氏が第一回報告に於て「チアノクブロール」六乃至七立方仙迷を用いて四十六・三%の治癒者、四十七%の輕快者を見たりといえるが如き非常なる良成績を収めしことを言明して置きながら、舌根未だ乾かざるに其の説を變更し、右の分量の危険にして之を減すべきことを説きしが如き、実に矛盾撞着の甚だしきものなり、是に由て之を觀るも、同氏の第一回報告の信ずるに足らざることは明かにして、尚お之に加うるに試験動物の病理組織的所見に於ても、緒方氏の指摘非難せしが如き缺陷の存するあり、古賀液の声価愈々地に墜ちて未だ暮年ならざるに殆ど世に忘らるるに至りしもの、蓋し怪しむに足らざるなり。

若しそれ「チアノクブロール」を注射したる結核動物の比較的長く生命を保つの故を以て同液の効果ある一証左

となすが如き古賀及び草間二氏の所説に至ても、同じく大学派の反駁せしが如く学問上殆ど何等の価値をも有せざるなり、よしや動物の生命の割合長く保つことありとするも、古賀液にして結核性病竈其者を治癒すること能わざる以上は、普通の結核剤と五十歩百歩のみ、何ぞ特に科学的療法と称するを得んや、又た時として試験動物に於ける結核性病竈の治癒せる痕跡を認むることありとしても、直ちに之を「チアノクブロール」の効力に帰すること能わざるや明かなり、何となれば家兎「モルモット」の結核に対する感受性は必ずしも同等なるものに非ずして、其中には比較的抵抗力の強き者もあればなり、然而北研の志賀博士も其の著書『臨牀細菌及免疫学』中に記して曰く結核の実験的化学療法に於ては既に結核病竈を生じたる動物を完全に治癒するに非ざれば化学的療法に成功したるものと云うべからず、従来の報告の如く、試験動物の死期を多少延長せしめたりと云うが如きは未だ以て結核治療を談ずるに足らざるなりと、同じ北研の士に於ても言外に古賀液の効果なき所以を暗示せること此の如し、何ぞ必ずしも大学派の反対を待たん、苟くも古賀液の結核菌を死に致すの力無く、又た試験動物の病竈を治癒すること能わざること明白なる以上は、仮令い臨牀上の成績を云為するとも、焉んぞ学者の信用を得るに足らんや。

又た「チアノクブロール」が癩病に対して卓効を奏すとの説に至ても容易に信を措くに足らざりき、北研の高野氏は癩病患者四十名に注射して結節の減少し知覚運動の麻痺治癒軽快せるを認め、癩病に著効を呈することを報告せしも、大学派の笹川氏の実験成績は全然之に反し、何等の効果をも認めざりき、「ツベルクリン」「テトロドトキシシン」でさえ癩病に多少の影響を与うることを思わば、古賀液も亦た一定程度まで其の作用を呈すべきこと無きにも非るべし、然りと雖兩派の成績右の如く相反対せるを見れば、誰か容易に其の著効あることを肯定するを得べき、借問す、今日に至るも尚お「チアノクブロール」を癩患者に賞用して著効を収めつつある者果してこれ在りとする乎。古賀液問題の起りてより以来、大学派は飽迄も攻撃の態度を執り、其の治療的效果なきことを力説するに勉めしも尚お未だ同液の正体を暴露すること能わざりき、芳我氏の試験用に供せし薬品が「チアノクブロール」と全然

同一のものに非ざりしことは古賀氏にとりて甚だ好都合なりしと云うべく、又た遁辞を設くる上に於ても多くの便宜を有したりき、看よ同氏の芳我氏に対する駁論の一節を、曰く『全く異なる薬物を用いたる実験を根拠として想像的に討論せられたるに対しては答弁の限りに非ず』と、又た曰く『吾が「チアノクブロール」は特別な操作を施したるものにして単に「チアン」加里と「チアン」銅との複塩より成るに非ず』と、かくして古賀氏は巧みに大  
 学派の攻撃を切り抜けんせり、されども識者より之を見れば蓋し窮余の遁辞に過ぎざるのみ、けだし芳賀氏の実験に用いし薬剤が古賀液と全然同一のものに非ずとするも、而かも其科学的成分の「チアン」加里、「チアン」銅なる以上は、之を目して『全く異なる他の薬物』と称するが如きは、殆ど三百代言的詭弁にして、学者の言に非ず、  
 又た『想像的討論』と称するも、断じて失当の言なり、而して尚お依然として「チアノクブロール」の化学式を秘密にして公言せず、何たる厚顔無恥の態度ぞや、之が為め大学派は勿論多数識者の反感を招きしこと一層大となり、遂に薬学博士石津氏の手によりて公然其の科学的集成を発表せらるるが如き結果に陥りぬ、而て古賀氏の所謂特別の操作なるものが、決して斬新の処置にもあらずして、塩化「カルチウム」の混合に過ぎざりしことも同時に明白となり、人をして茫然自失の感に堪えざらしめたり、斯くして古賀液の秘密も遂に暴露し、其正体明白となりしかば、愈々其の声価失墜し最早や争うて之を購求せんとする者もなく、早晚薬品市場より駆逐せられんとす、あわれと云うも中々愚かなり。

吾人は古賀液「チアノクブロール」の運命を回想する毎に未だ嘗て「ヘトール」を連想せずんば非ず、今を去ること十七年前ランデレルによりて始めて発表せられたる「ヘトール」(肉桂酸)の静脈注射療法は、結核病に対する卓抜の新療法として一時医学界に喧伝せられたることありき、其の説に依るに「ヘトール」は結核性病竈の周囲に結締織新生を促し以て、結核病機を抑制停止せしむる作用ありという、古賀液も亦た同様の作用ありと称せられたり、草間氏の所説を見るに、「チアノクブロール」は身体防衛の衝に当れる組織細胞に最も適当なる刺激を与え、

其機能を亢進し又た其増殖を促盛して結核性病竈の進行を抑制する特殊作用を有すと云う、然ども「ヘトール」も、「チアンオクブロール」も共に這般の作用無きことは病理学的研索上遺憾なく証明せられぬ、ウォルフは、「ヘトール」を注射したる試験動物に於て、毫も結核性病機の蔓延を抑制せらるること能わず、又た結核節の周圍に強き結締織新生の発起せざることを認め、千九百〇一年六月伯林内科学会に其所見を発表せしが、ライデン、アー、フレンケル、フュールプリンゲル等諸大家も亦た之に同意賛成を表せり、而て古賀液に於ても既に前述べたるが如く緒方知三郎氏の最も適切なる反駁に逢いて根本的に其の効力を否定し去られぬ、噫両者共に其の作用を一にし其注射部を同うし、而て其運命をも等うせしは、亦奇ならずや。

古賀液の始めて世に出ずるや、其勢い恰も脱兎の如く一時医界を風靡するの概なきに非ざりき、然るにやがて其の真価の暴露せらるるや、忽ち喪家の狗の如き状に變じ、今や僅かに余喘を保つに過ぎざるの觀あり、其の轉變の急なる何ぞ此の如く甚しき、思つてここに至れば誰か其の運命の果敢なかりしに一掬の涙を濺がざるを得んや、然ども翻つて考うれば是れ亦自然の数のみ、羊頭をかけて狗肉を売るとも、何ぞ其の久しきを保つを得べき、名を新業績新葉等に籍りて黄金を醞釀するに急なるの徒、豈いつ迄も世を欺瞞するを得んや、世の学商の輩、須らく相鑑みて可なり。

(完結)

近時に於ける虎列拉「ワクチン」及び発疹瘰癧扶斯病原に関する兩派の衝突に就ては、あまりに事件新しきと且論戦の未だ終局を告げざるを以て茲に記載せず、されど、いずれ他日を期して続衝突史を起草するの意あり、予じめ之を讀者に告ぐ。

\* \* \*

読者の中、往々吾社同人に書を寄せ、衝突史の北里派に酷なるを詰るものあり、吾人は意外の感なきを得ず、苟くも事理真相を達観し得べき士ならんには、必ずや衝突史の記事の公正なるを認むるに躊躇せざるべく、又た眼光紙背に徹するの士ならば、該記事中に幾多の教訓と暗示との含蓄することを看破するに難からざるべし、吾人は故意に大学派を挙げ北里派を貶せんと欲するにあり、一突史の稿を起せしに非ず、学問上の論戦に於ても、成敗利鈍の由て来る所を明かにし以て現代の医界を警めんと欲するにあり、一部を読者が、吾人を目して北里派に酷なるが如くに思惟するは、蓋し色眼鏡をかけて吾人を見るが為めのみ、若しそれ虚心冷静以て本篇を通読せば、吾人の言の肯綮に中れるの点少からざるを看取し得可けん、敢て一言す。

(雄文社出版部、大正七年一月)



- 『学問上に於ける大学派と北里派との衝突史』（雄文社出版部、一九一八（大正七）年一月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。